

---

# ただまほ。 // 正しい魔法の使い方

維川 千四号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ただまほ。 / / 正しい魔法の使い方

### 【Nコード】

N7870U

### 【作者名】

維川 千四号

### 【あらすじ】

魔法が科学の一部 『魔法科学』となった世界。魔法科学の名門校と名高い高校に、一人の少年が入学する。しかし、彼が魔法でやりたいことは……。\*\*\*電撃大賞一次選考“不”突破作品第二弾、またもや堂々公開\*\*\* 7/11〜7/22までの連日12:00に更新予定。ご意見・ご感想頂けるとありがたいです

## 第一談。主人公たるもの質問は堂々と（前書き）

作中、一人称・二人称・三人称とコロコロ変わりますので、そういったのが苦手な方はご遠慮くださいませ。

また、作中の主人公の言動を真似ると痛い目で見られる可能性があるるのでご注意ください。尚、そのような事態に陥っても当方は一切の責任を負いかねます。

## 第一談。主人公たるもの質問は堂々と

もしも昔の人間が『飛行機』を見たらどう思うだろうか？

もしも『ライター』を見たら？

もしも『携帯電話』を見たら？

『冷蔵庫』 『自動車』 『電子レンジ』 『テレビ』 『インターネット』  
と。

無数に、無尽に、小さなものまで挙げ続ければ限りがないが、これら全ては『科学』の賜物だ。

長い歴史を経て、人類は進化ではなく進歩を続けてきた。理解を超える現象を『科学』によって解明し続け、そして自らの力として利用してきた。

だからたとえ昔や今、理解を超える事柄だとしても、未来には『科学』として扱える可能性を、人間の探究心は秘めている。

さて、先ほど投げ掛けた質問に私自身の意見を述べようと思う。

『飛行機』は、自在に空を飛ぶ乗り物。

『ライター』は、手の平から火を出せる道具。

『携帯電話』は、遠くの人の声が聞こえる薄い板。

もしも、これら『科学』の賜物を、昔の人間が見たなら口々に言うだろうか。

『魔法』のようだ、と。

そして二十一世紀初頭、人類はついに『魔法』を『科学』の一部にすることに成功した。

人類は進歩を続ける生き物だ。

だが時として、過ちを犯す生き物でもある。自ら不幸を生み出す生き物でもある。

『飛行機』は、その機動力で不毛な戦地を広げた。

『ライター』は、その手軽さで悪意の火種を生んだ。  
『携帯電話』は、その利便性で人間の関係を弱めた。

だけどそんなことを望んだ科学者は、一人としていないはずだ。  
誰もが皆、自らの研究は人を幸せにするものであれと願ったはずだ。  
しかし、不幸は生まれる。人間のみならず、それは世界を蝕む。

たとえ、不運な事故であれ 明確な人為であれ。

だから私は少しでも多くの人々が、できることなら全ての人々が、  
幸せでいられることを祈り続ける。

もちろん、これは私の勝手な行動による、勝手な祈りだ。

もしかしたらこれも、長い歴史の上の一つの過ちなのかもしれない。  
い。

だけど、だから、だからこそ。

私はこの世界の行く末を、見届けなければならぬ。

野々原市（野々原市）は『魔法科学』で有名な学術都市である。

高校・大学などの教育機関や、国立・民間の研究施設が市内にい  
くつも点在し、住民の半数以上がその関係者となっている。

そしてそんな野々原市において、名門と呼ばれる学校がある。

私立鈴ノ美山（すずのみやま）高校。

ヨーロッパ・アメリカに続いていち早く『魔法科学科』を取り入  
れた鈴ノ美山高校は、その圧倒的な生徒数と、各国から集めた優秀  
な教師陣によって国内のみならず、世界有数の『魔法科学』の名門  
校となった。

そして季節は桜咲き誇る春。

場所は、入学式が行われている大ホール。

普段は学園祭や式典などでしか使わないそこには、ブレザータイ

プの真新しい制服に身を包んだ数多くの学生が、整然と並んだパイプ椅子に静かに座っていた。さらに彼らの父母たちもその後ろに用意された椅子に座り、それを囲むように壁際に教師陣も並ぶ。

「以上で、鈴ノ美山高校の入学式を終了とさせて頂きますが、何か質問のある方はいらっしゃいますか？」

ホール前面の舞台に設置された壇上で、スーツのよく似合う初老の女性が手元のマイクを使い、式を締め括ろうとしていた。

質問、と言っても例年誰も訊くことはない。

こんな大勢の前で堂々とそんなことができる人間など、そうそういるものではないし、人目を特に気にする高校生なら尚更だ。

だからこれは形式上。あくまでもカタチ　のはずだったが、

「はい！　質問、あります！」

今年は違った。

学生たちのちょうど真ん中辺り。ホール全体に届くほどの通る声で、一人の男子学生が手を高々と挙げた。

一瞬のざわめき。自然と式場全員の視線が彼に集まる。

しかしそれに臆することもなく、続いて彼は勢いよくパイプ椅子から立ち上がる。

「あの！　『風』の魔法を使えるには、どのくらい掛かりますか？」

そんな彼の質問に　というより、質問されたという事実によや驚いたものの、

「……『風』……と一口に言っても色々ありますからね。扇風機程度の風だったり、気象を操れるほどの風だったり……君は、どの程度の魔法科学を使いたいのですか？」

壇上の女性は柔和な笑顔を浮かべ、すぐに丁寧に訊き返した。そして男子学生も、それに答える。

「いえ、そんなすごいレベルじゃなくていいんです。僕はただ姿勢を崩すことなく凜と立ち。」

親からもらった何一つ恥じることのない顔で。

迷いのないまっすぐな瞳で。

灰色の髪かみの少年は続ける。

「スカートめくりができるレベルの魔法が使いたいですっ！」

彼の名前は春はる吉きち 藤ふじ春はる吉きち。この物語の主人公の一人だ。

私は彼とこの世界の行く末を、見届けなければならぬ。

正直、自信はない。

## 第二談。それぞれの炎

鈴ノ美山高校入学式の前日。野々原市北西部に位置する住宅街の  
一画。

ついさつき役割を終えた太陽の代わりとばかりに？それ？は地上  
で輝いていた。

赤く。紅く。

ユラユラと。メラメラと。

大気を貪り喰うように。そこに在る全ての物を呑み込むように。  
夜空というスクリーンに映える、鮮やかな紅蓮。

煌めく星々も、見守る月も。

その輝きには敵わず、価値を失ってしまふ。

誰もが皆、その色に目を奪われる。

それを目の前に、ただ立ち尽くす以外の術がない。

どれだけ否定したい現実であろうと、肯定せざるを得ない。

『……ああ、なんて美しいの……』

紅蓮を囲う群衆の一番後ろ。それと同じ色の鮮やかなロングコー  
トを纏った彼女は、我が子を褒めるかのように思わずそう呟いた。

艶やかな唇から零れる異国の言葉。赤く照らし出されたその顔は、  
西洋人形のような美しく整った金髪碧眼。

その碧い瞳は、うつとりと見蕩れるように紅蓮を見つめていた。

群衆から声上がる。紅蓮が一段と大きくなったからだ。

すると、彼女の口元がわずかに綻びを いや、歪みを見せた。

狂気によく似た、歓喜の歪みを。

『もっと……もっと、もっと。もっと、もっともっともっとと  
』！

自ら生み出した熱が、自らをさらに熱するように。

止まることなく、留まることなく、熱が熱を焦がし。



彼女の心は加速し、加熱する。

『もつと燃えて、燃え上がって、燃え広がって』

これは彼女に宿った？炎？。

燃え盛ることは知っていても、鎮まることは知らない復讐の衝動。

『？私たち？を否定し続けたこんな世界、灰も残さず焼き尽くして！』

そして、目の前に存在していたどこかの誰かの家は。

数え切れないほどの想いが詰まっていたであろう、どこにでもあ  
るような二階建ての一軒家は。

野次馬が構える携帯電話のカメラの向こうで、意外にあっさりと  
崩れ去った。

\* \* \* \* \*

はじめまして、袴田<sup>はかまた</sup>るみねです。

突然ですが、私には気になる男の子がいます。

自他共に認める優秀な成績で、難なく鈴ノ美山高校・魔法科学科  
に入学し。

自他共に認める秀麗な容姿で、幼い頃から日常のように告白され  
続け。

自他共に認める素敵な家庭で、両親の愛情を一身に受けて何一つ  
不自由なく育ってきた。

そんな私にも今、気になって仕方がない男の子がいます。  
いつだって、どこにいても、何をしていても。

どうしたって どうしようとしたって。  
彼のことから離れません。忘れたくても忘れられません。

その姿を一目見た瞬間に、網膜と海馬に永久保存です。  
そして今も、彼の一拳一動を録画中です。

少し離れた席に座る彼。

その身体を、顔を、瞳を、髪を、私はただひたすら見つめていきます。

先生が何か話し始めたみたいですが、残念ながら私の耳には全く入ってきていません。

なので皆さんは、私の代わりに話を聞いておいてください。よろしく願います。

「皆さん入学式お疲れ様でした。本日よりこの魔法科学科・一年F組を担当させていただきます、教師一年目・フリード＝オーウェンです」

クラス全員が席に着いたのを確認すると、教壇に立つ彼は流暢な日本語でそう言った。

青年と言っているほど見るからに若い、頼りなさそうな優男。

それが誰もがフリードに対して抱く印象であり、

「えーっと……あれ？ 次、何するんだっけ？」

と、慌てて手元のメモを見る姿は、印象通りの頼りないものであった。

「あ、そうだそうだ。えーっと、先ほどの式で何か分からなかった点がある方はいますか？」

メモで確認した通り、フリードが訊く。

式を締め括った初老の女性 校長が最後にしたものと同じ内容

しかし、新入生全員の前とクラス全員の前では発言のしやすさがまるで違う。つまりこれが、形式上ではなく実質上の質問の機会であった。

すると、デジャヴのように一人の生徒が真っ直ぐと立ち上がり、天高く手を挙げた。

そしてこちらもまた、聞き覚えのある質問が投げ掛けられる。

「結局、スカートめくりができるレベルになるには、どのくらい掛

かるんですか？」

さつき教えてもらえなかったんですけど、と少年は文句を口にしました。

まだ幼さが残る顔立ちと、同じくやや低めの身長。長いとも短いとも言えない長さの、遠くからでもよく目立つ灰色の髪。

当然ながら、その少年は藤春吉であった。

残念だが。

「えーっと、ですね……ちょっと僕じゃ分からないんで、後で他の先生方とよく相談しておきますね」

そう言って微笑むフリード。もちろん、ここで言う『相談』とは質問の内容についてではなく、質問した人物についてのことである。しかしそんなことは一切知らない、予想すらできない春吉は「分かりました。お願いします」と素直に納得し、高々と挙げた手を下げた。

だからその様子にフリードは、ひとまず胸を撫で下ろす。しかし同時に、その胸には『今度また訊かれたら、どう対処しよう？』というか、僕にこの子の面倒は重過ぎないか？』という不安が湧き出していた。

しかし、とりあえずの窮地は脱した。決着はついていないが、戦いは終わったんだ。

そう思い、次の行動に移ろうとした平和主義者に、  
「それじゃ、違う質問いいですか？」

未だ自分の席に着陸しない爆撃機は、攻撃を再開した。

「ど、どうぞ……」

一体今度はどんな質問が来るんだ、と戦々恐々で身構えるフリード。

だが、そんな彼の予想を大きく裏切り、

「先生はどんな色が好きですか？」

まるで女子小学生の初めての交換日記のような、至って平和的な質問が返ってきた。

「ぼ、僕の好きな色……ですか？」

思わず少し声が裏返った。

完全なる臨戦態勢（ただし回避と防御のみ）を取っていたフリードにとつて、その不発弾は正直拍子抜けだった。だけどそれは同時に『何だ、この子も案外普通の子じゃないか』と彼を安堵させかけた瞬間、

「はい、好きな色です。パンツの」

不発弾は炸裂した。

「あ。もちろん、パンツって女性用下着のことですよ。変な誤解がないように言つときますけど」

それも、救いのない爆発力で。

「……………」

藤春壱。実に予想を裏切らない男だった。

残念極まりないが。

「僕は白が好きなんですけど、黒も黒で捨てがたくて。だけど、水色の縞パンというブームも無視できないし、いつそ穿いてないという選択肢も」

「藤くんストップ！ ちょっといいかな？」

「はい、何ですか？」

「その続きは今度、進路指導室でじっくりと話をしよう。君の人生という進路についても深く考えながら」

「……分かりました。それじゃ今度までに各色の長所と短所をリストアップしておきます」

「よろしく願います。僕もできるだけ君に協力できるよう、他の先生方とよく話し合っておきます」

そうやって爽やかな笑顔で締め括り、「他に学校……について質問のある方はいますか？」と、フリードは春壱を除くクラス全員に問い掛け直す。

すると、また一人の男子生徒が手を挙げ、

「少し違う質問なんですが、いいですか？」

と、律儀に尋ねた。

短めに切り揃えられた髪と、無駄な遊びのないシンプルな銀縁眼鏡。そして何と言っても、鋭利とも呼べるほど切れ長な目が印象的な少年。

フリードが手元の生徒名簿に視線を落とす。そこにはクラス全員の顔写真が五十音順に並んでいて、上から探し始めた彼は比較的早く目的の顔を見つけた。

名前は

さきもりゆきみち  
崎守幸路。

カメラを睨みつけているかのような、そんな目つきで撮られた写真。正直、フリードの苦手なタイプだ。しかし、そんなことを言っているのは教師失格であるし、フリードには彼の名前に見覚えがあった。

そうか。彼が、例の。

その名前は春吉とは全く別の意味で有名で、同時に安心・安全という保証でもあった。

多分、写真うつりが悪い子なんだろうな。そう思いながらにこやかに（とはいえ苦手意識は消えないので若干こちない笑顔だが）、「どうぞ、何でも訊いてください」と答えるフリード。

しかし予想に反して　いや、ある意味予想通り、「このホームルームはまだ続きますか？　この後予定があるので、できるだけ早く終わらせてもらいたいんですが」

眼鏡のレンズの奥から、氷のナイフのような　悪意でも敵意でもなく、純粹な殺意を宿すような視線と、低温火傷してしまいそうなほど冷淡な口調の言葉が返ってきた。

フリードの世界が凍りつく。バナナで釘が打て、バラが粉々になりそうだった。

ちなみに余談だが、このときフリードは『蛇に睨まれた蛙』という日本のことわざの意味を心底理解したという。

だがしかし、いくら若く頼りなさそうでもフリードは教師であり、さらにはこのクラスの担任である。一生徒に臆するようなことはな

いい、あつてはならない。

だから彼は、堂々と答える。

「……ご、ごめんなさい。すぐ終わらせませす」

その堂々さたるや、クラスほぼ全員に『この人が担任で大丈夫か』と思わせるほどだった。

そして有言実行。すぐにホームルームを再開する。もちろん、全てはフリードの予定通りであり、決して一生徒にビビったからではない。

「えーっと、魔法科学は近年多岐に活用されている分野であり、発展途上の可能性に満ちた分野でもあります。なので皆さんが優秀な科学者になれるよう、まだまだ未熟な僕ですが尽力していきたいと思っています。これから一年間、どうぞよろしくお願いします」と、彼がようやく先生らしいことを言い切ると、教室は歓迎の拍手に包まれた。

そして心地良いその音が収まっていく中、フリードは波乱に満ちた初めてのホームルームを締め括る。

「それと、昨日もまた市内で不審火がありましたので、もし怪しい人を見かけた場合は決して近寄らず、すぐに警察に連絡してください。えーっと、では、これで今日は終了します。皆さんお疲れ様でした」

起立、礼。

と、その号令と共にF組の面々が一齐に、思い思いに動き出す。一人で帰る者、友達と帰る者、そのまま教室でおしゃべりを始める者。

しかしそんな中、席に着いたまま動かない女子生徒が一人いた。見事に整った顔立ちに、女の子にしては高い身長。スカートから覗く長い脚と、左右に結った長い髪が目を惹く少女。

彼女の名前はるみね 袴田るみね。この物語のもう一人の主人公だ。

そして、そんな彼女の視線の先には 燃え上がるような熱視線

の先には、一人の男子生徒。

今の彼女にとって、気になって仕方がない男の子。

そんな彼が教室から出たのを見て、るみねは鞆を手に席を立ち、急いで後を追う。

廊下でも、階段でも、下駄箱でも、校門を過ぎても。

時には壁に隠れ、柱に隠れ、電柱に隠れ、自動販売機の間隠れ。近からず遠からず。一定の距離を保ちつつ、るみねは彼の後ろを歩き続ける。

これこそ、袴田るみね人生最初の尾行。そして、人生最初の事件であり。

異様にサブタイトルの長い二時間サスペンス風に言うならば、『女子高生探偵・袴田るみね』の開始であった。

\* \* \* \* \*

「お。いらっしやいませ『喫茶パトリニア』へ」  
カランカランと鈴の付いた扉を開けると、カウンター席に座る彼はそう言った。

鈴ノ美山高校の制服を着た、灰色の髪少年。

そしてそんな彼こそ、るみねの尾行対象

「なっ……何でアンタがいるのよ？」

ではなかった。

「何でって言われても、ここ僕の下宿先だし」

二階に部屋借りて住んでるの、と春吉は天井を指差す。

喫茶パトリニア。鈴ノ美山高校より徒歩二十分。テーブル・カウンター合わせて全十八席。落ち着いたモダンな雰囲気と、芳しいコーヒーの香りが漂う喫茶店。おすすめメニューはスペシャルパフェ・八百円（鈴ノ美山高校・新聞部発行『野々原の歩き方』より）。

「まあ立ち話もなんだし、とりあえず座れば？ えーっと……」

「袴田」

「ああ、そうだ。ツインテール袴田だ」

「勝手にリングネームみたいなの付けないでくれる？ この女子プロレスラーよ、それ」

「むむ。それがお気に召さないのなら、ツンデレ袴田ってのもあるけど？」

「却下。そもそも私はアンタにデレ要素を見せた覚えはない。というか、昨今のツンデレの基準に、私は異議を唱えるわ！ 何にでもツンデレツンデレって言い過ぎなのよ！」

「なるほど、それも一理ある。だが、ツンデレキャラにツインテールが多いという説も、否定できないのでは？」

「それは確かに否定できない事実。だけど、私はその定説からは外れてるわ。ツンデレでもなければ、今後ツンデレになることもないからね」

アンタの期待通りじゃなくて残念だったわね、と不敵に微笑むるみね。

しかし残念だが、その行為こそ昨今ツンデレと呼ばれるものだと彼女は気付いていない。

そしてもちろん、春巻がそんなことに気付くわけもなく、「そうか。それは残念だ」と分かりやすく肩を竦めた。

「うーん……やっぱり現実には漫画や小説みたいにはいかないもんだな　って、あれ？　今僕、何か矛盾したこと言ってるような気も……」

そう呟きながら頭を悩ませる春巻。しかしそれは踏み込んではいけない、あるいは飛び出てはいけない領域の疑問。

だから春巻はすぐに　まるで神の導きのように、それで、と本題に戻った。

「とりあえず座れば？ ツインテール袴田」

「だから、その呼び方やめてくれる」



「それじゃあ、ポニーテール袴田は？」

「いや、髪型変わってるし！　というか、問題はそこじゃないし！」

「じゃあ、フェアリーテール袴田」

「もはや髪型じゃないし！　私、おとぎ話でもないし！」

「それなら君は一体、何テール袴田なんだ？」

「何故にテール限定！？　私に普通の袴田という選択肢はないの！」

「いや、自分で自分のことを普通って言うのもアレだけどさ！」

と、るみねが自分のキャラを明確にしたところで、

「あら、楽しそうね？　春ちゃんのお友達？」

カウンター席の内側に掛かるカーテンの奥から、一人の人物が現れた。

うわっ、綺麗な人。

るみねは素直にそう思った。

歌舞伎の女形を思わせるような目鼻立ちに、一つに縛った長く艶やかな髪。年齢は二十代後半といったところで、シャツとズボンというシンプルな格好が、そのスラリとした長身をより際立たせていた。

「はじめまして、店長のおみなえし女郎花です」

ちなみにこんな字を書きます、と丸っこい字で『女郎花』と書かれた胸元の名札を強調して見せる女郎花。

「えっと……結局、あなたは何テール」

「どうぞ普通の袴田と呼んでください。私は至って普通の袴田るみねです」

「あらあら、若いのに謙虚なのね」

と、そんな風になされたことを言ってから、

「それじゃ、るみねちゃん。早速だけど、ご注文はどうしましょうか？」

女郎花は笑顔でメニュー表を差し出した。

しかしそれを受け取ることもできず、るみねは返答に困った。何故なら彼女の目的は、この店自体ではなかったからだ。

さほど広くない店内をぐるりと見渡す。テーブル席に三組、計七名。しかし目的の？彼？の姿はどこにもない。おかしい。ここに入っていくのを確かにこの目で見たのに

るみねが、そう思ったときだった。

「悪い。待たせたな、藤」

再びカーテンの奥　この店のキッチンスペースから、一人の男の子が出てきた。

サンドウィッチの乗った皿を片手に持った、女郎花と同じ格好の男の子。短髪に銀縁眼鏡の少年。さっきまでの制服姿とは違うが、そのレンズの奥に光る鋭い眼光の持ち主は間違いなく、間違いようもなく。

るみねが　間違えるはずもなく。

「　崎守幸路」

彼女の尾行対象である？彼？がそこに居た。

「ん、鈴ノ美山の制服？　藤の友達か？」

幸路のその鋭過ぎる視線が、るみねから春きへと移る。しかしすぐさま、

「冗談やめてよ。友達に見える？　私とこのバカが」

と、るみねが一蹴。

そして続けてそのバカも、

「そうだよ。失礼だよ、幸路。こう見えても僕らは友達以上、恋

」

そこまで言ったが、それ以上は何も言わなかった。いや、言えなかった。

何故なら、幸路の持ってきたサンドウィッチ二枚を、心優しいるみねがその口いっぱい押し込んであげたから。その電光石火の親切心に、春きは言葉を失ったからだ。

「私は袴田るみね。あなたと同じ一年F組よ」

「ん、そうだったか。悪い。まだ全然名前を覚えてないんだ」

言いながら、幸路は春きの前に皿を置く。

しかし、ハムスターのように頬を膨らませて口の中を処理し続けている春吉には、残りを食べるどころか未だしゃべることもできそうになかった。

だから、その姿を視界の片隅で確認して　しばらくは邪魔が入らないだろうと安心して、るみねは続ける。

「……そっか。私のこと、覚えてないんだ」

「悪いな。昔から人の顔と名前を覚えるのが苦手なんだ」

「いいわよ、別に。完璧な人間なんていないんだから、誰にでも苦手なものはあるもの」

そう言って、るみねはこれ以上ない満面の笑みで返す。

「ところで、崎守くんはここで何してるの？」

「何、と言われたら、見ての通りのバイトだけだ」

ほら、と幸路は胸に付けた名札を見せる。そこには彼の顔には到底似合わない、丸っこい字で『幸ちゃん』と書かれ、その横には小さな初心者マークのシールが貼られていた。おそらく、名前を書いたのもシールを貼ったのも女郎花だろう。

「ふーん。こんなことしてるなんて、随分と余裕があるのね？」

「ん？ いや、余裕がないからバイトしてるんだが……」

幸路が小首を傾げる。

どうにも会話が噛み合っていない。何か大事な歯車が欠けている気がする。

しかしそれが何かを思い出せないまま、会話は続いていく。るみねが、続ける。

「崎守くん。あなたにどうしても伝えたいことがあるんだけど、聞いてもらっていい？」

それを伝えるために、私はここに来たの。

と、何一つ恥じることなく堂々と、彼女は言った。

「……俺に？」

幸路の疑問がますます強くなる。元々悪い目つきが、より一層陰しさを増す。るみねに突然そんなことを言われる覚えがない。同じ

クラスらしいが名前も顔も知らなかったし、どこかで接点があった記憶もない。

だがそんなことを考える幸路に、るみねは「ええ、崎守くん」とはつきり答える。

「……分かった」

幸路が応じる。しかし、未だ感じている違和感の正体は分からない。

分からないからこそ、応じる　　が。

「分かったけど、明日にしてくれないか？ さっきも言ったけど今はバイト中なんだ」

だから、と幸路が続けようとしたところを、

「いいわよ、幸ちゃん。どうせこの時間は暇だし」

隣の女郎花がにこやかに遮った。そして続けて「それに女の子から誘われたらバイトなんてサボっちゃえばいいのよお」と店長が言うべきではないだろう台詞をとびきり嬉しそうに吐いた。

「そ、そうですか……それじゃあ、少しだけ」

そう言っただけ幸路は動き出す。

彼女の話がどんな内容かは分からないが、少なからずここですべき内容ではないだろう。それに他のお客さんの邪魔にもなりかねない。だから、とりあえず店外に出ようと思い、彼は歩き出した。

しかしそんな彼を、るみねは制止する。

「そのままでもいいわ。できれば女郎花さんにも聞いてもらいたいし」

一応このバカにも、と仕方なく春壺を追加するるみね。

本来なら幸路が一人きりになったところで伝えるはずだったが、予定変更。ここは女郎花と春壺に証人となってもらおう。彼女はそう思った。

だから「いやん。最近の若い子って大胆」と盛り上がる女郎花と、やっと口の中が半分以下になった春壺の見守る中。

「崎守くん。私　　」

るみねが口を開いた。

彼を知ったときから抱いた想いを。

一目見たときから抑えきれなくなった心を。

今も赤く熱く？炎？のように燃え上がる気持ちを　ぶつけるために。

「次のテストでは絶対に負けないからっ！」

るみねは勢いよく幸路を指差した。今や彼女の代名詞とも呼べるツインテールが、その動きに合わせて大きく揺れた。

「……、……え？　何？　何の話？　告白タイムじゃなかったの？」

と、思考停止から復帰し、キョロキョロと困惑する女郎花。

それからややあつて告白をされた本人が、険しさは消えたが相変わらずの目つきで、

「……ああ、そうか。あの袴田か」

なるほどそういうことか、と一人頷いた。感じていた違和感の正体が分かった、欠けていた歯車が見つかったという具合に。

「あ、そっか。幸路と袴田って一位と二位か」

一歩遅れて、ようやく口の中が空になった春巻が納得する。

そんな春巻に「どういうこと、春ちゃん？」と女郎花が訊く。すると彼は、つまりね、と説明を始めた。

「鈴ノ美山高校の入試の話。幸路が前代未聞・前人未到の全教科満点の一位で、袴田が惜しくも二位。要するに、袴田は二番目の女という」

と。

そこまで言って、やっぱり春巻はそれ以上何も言えなかった。

もちろんその理由は、気付くとまた、口の中にサンドウィッチが入っていたからに他ならない。

魔法とは、エネルギーである。

光エネルギー、熱エネルギー、運動エネルギー、電気エネルギー、結合エネルギー。

それらを把握し、流れを操作し、理想の現象を引き起こすこと。それが今まで俗に『魔術』と呼ばれてきたものである。

そしてここでは、それらエネルギーの流れを科学的アプローチによつて操作することを『魔法科学』と定義させてもらう。

また、光エネルギーを扱うものを『光』属性の魔法科学、熱エネルギーを『火』属性、運動エネルギーを『風』属性、電気エネルギーを『雷』属性、結合エネルギーを『地』属性と、大きく五つのジャンル分けをさせてもらう。

「……って、何で私がアンタに勉強教えてるのよ!？」

引き続き喫茶パトリニアのカウンター。るみねはノリツッコミを披露していた。

その手には、春吉の持っていた『魔法科学・基礎編』という教科書。最初の『魔法科学とは』というページを開いて。

「いや、ほら、人に教えるのも勉強になるって言うから、袴田のためにもなるかなと思って」

それに、と隣に座る春吉は続ける。

「やっぱり学年トップクラスの頭の良い人に教えてもらえると、分かりやすいと思うし」

「……………」

言語解析

『学年トップクラス』『頭の良い人』

解析終了。

その結果、るみねは口元をヒクつかせ、

「ま、まあ………そこまで言うなら。そこまで言うんだったら、特別

に教えてあげないこともないけどね。だけど仕方なくよ、仕方なく。アンタみたいなバカが、誰にも教わらずに勉強するのは無理があるだろうし」

喜びを表情に出さないように我慢していた。

しかし残念だが隠しきれていない上に、その発言も昨今のツンデレに分類されることも、彼女は気付いていない。

「それじゃあ、この私が親切丁寧に分かりやすく教えてあげるわね」と、意気揚々・気分上々になるみねが授業を再開する。

「それで、今私が読んだところは理解できた？」

「うん。なんとなく」

「割合で言つと？」

「三割八分七厘」

「うん、その打率ならメジャーリーグに行っても通用しそうね」

きつと安打製造機って呼ばれるわ、とるみねは教科書を閉じた。

彼女は役に立たないものは使わない主義である。

「例えば……アンタ、ケータイ持ってる？」

「もちろん。入学祝いに母さんに買ってもらった」

嬉しそうに、春吉がポケットから二つ折りタイプの携帯電話を取り出す。それは最新機種というわけではないが、かといって特に古いわけでもない普通の携帯電話。

「で、アドレス交換でもするの？」

「しないわよ。というか、できないし。今日、家に忘れてきちゃったのよ」

そう言つて、不機嫌そうな表情を浮かべるみね。しかし、そんなことを今さら悔やんでも仕方がない。合理主義者である彼女はそう割り切つて、授業を先に進める。

「ケータイつてさ、さっきの五つのエネルギーの内、どれで動いてると思う？」

「そりゃ、電気エネルギー。コンセントで充電するし」

「正解。でも、絶対に充電しなきゃいけないってわけじゃない」

ちょっと借りるわよ、と春吉の携帯電話を手取る。そして手際よくその一部を、携帯電話の背面から電池パックを、るみねは取り外した。

「さっき読んだところの『科学的アプローチ』っていうのが、これのこと」

と、手にした電池パックを　その表面全体に走る模様を、春吉に見せる。

直線と円で描かれた電子回路のような模様。いや、よく見れば実際それは電子回路と同じく、鈍く光る金属で構成されていた。

しかし、一般的な電子回路と明らかに違う点が一つある。

それは、その異常なまでに複雑に入り組んだ　まるで魔法陣のような、構造だ。

「ああ、『方式』<sup>プログラム</sup>のことが」

電池パックの模様を見て、首を小さく縦に振った春吉。

そんな彼にみるみねは、「意外。そのくらいは知ってるんだ」と思ったことを素直にそのまま口にした。しかし、その言葉を春吉が気にする様子もないので、彼女は授業を続ける。

「それじゃ、知ってるってことで方式<sup>プログラム</sup>の説明は飛ばすわね」

つまりこの電池パックは、と言い始めたところを、

「いや、待ってくれ。一応、説明してくれ」

慌てて春吉は止めた。

「何ですよ？　知ってるんでしょ？」

「うん、知ってる。知ってるけど、念のため教えてくれ」

僕たちには、そうしないといけない義務がある気がするんだ！と、やけに真剣に力強く語る春吉。その顔はまるで、神のお告げを聞き、使命感に燃える勇者のよう。

そんな彼の気迫に圧倒されて、「わ、分かったわよ」とるみねは説明を始める。

「方式<sup>プログラム</sup>っていうのは、各種エネルギーの流れを操作するもの。魔法科学において最も重要な部分。ちなみに、この電池パックの方式<sup>プログラム</sup>



には『大気中の電気エネルギーを吸収する』という『雷』属性の方式構築ログラミングがされていて、それを利用すれば理論上、充電が不要になる。まあ今の技術じゃフル充電に一日以上掛かるけどね、とるみねは苦笑する。

「他に、例えば」

店内を軽く見回す。そしてカーテンの奥、女郎花と幸路が何か作業をしている近くに目的のものを見つけた。

「キッチンプログラムに置いてある冷蔵庫。そんなに古い型じゃないから、多分あれにも方式プログラムが組み込まれていると思うんだけど……さて、どんな属性のどんな方式プログラムでしょう？」

と、先生役に興が乗ってきたるみねが訊く。

「んー、普通に電池パックと同じじゃつじやないの？」

電気エネルギーを吸収ってやつ、との春吉の解答に、三十点、というみねの厳しい点数。

「正解は『庫内の熱エネルギーを放出する』という『火』属性プログラムの方式。魔法科学の本質はエネルギーの操作。何も吸収するだけが能じやない。それに、もし電気エネルギーを吸収したって、結局は『冷却』つまり『放熱』に使うんだから、その方が効率的でしょ？」

というより、とるみねは言葉を続ける。

「その方がエネルギーを無駄なく使える」

「無駄なく？」

彼女の言葉をオウムのように繰り返し、フクロウのように首を傾げる春吉。

しかし、その疑問を解消することなく、

「火力発電ってあるでしょ？」

るみねは言う。

「あれって燃料を燃やして、お湯を沸かして、その蒸気力でタービンを回して電気を作る。要するに熱エネルギーを運動エネルギーに、それをまた電気エネルギーに変換することで発電してるの。……ここまで分かる？」

そう訊かれ、春吉は頷く。

「うん、なんとなく。つまりは、発電所の中で蒸気機関車が走っているようなもんだろ？」

「別にそんな、遊園地のアトラクションみたいな楽しいものじゃないけど、あながち間違いでないわ」

むしろアンタの打率を考えると上出来かもね、とるみね。

「で、その火力発電　この国の主要な発電方法の発電効率っていうのが、約四十パーセント。まさしく国内電力の安打製造機ってわけ」

でもね、と少し残念そうになるみねは説明を続ける。

「それを言い換えると、エネルギーを変換する際に　電気エネルギーを作るために、最初の熱エネルギーの約六十パーセントが失われてしまうということ。つまり、半分以上の熱エネルギーが無駄になってしまう」

さらに蓄電・送電・配電の際に、その電気エネルギーにも無駄が生まれる。

「だけど、電気エネルギーを電気エネルギーのまま。熱や光、運動エネルギーを変換せず、そのまま百パーセント利用できれば、一切の無駄がない。資源に頼ることなく、エネルギーを使える。そんな考えの基に作られたのが『魔法科学』というジャンルよ」

と、言い切って。

魔法科学の基礎中の基礎の授業を終えて。

「ここまでで、何か質問は？」

自信に満ち溢れた顔でるみねが訊く。『我ながら惚れ惚れするよ　うな素晴らしい授業ね』と、心の中で誇っていた。

そして当然ながら、そんな完璧な授業を受けた生徒の言うべきことは一つ。

「僕は結局、いつになったらスカートめくりができるレベルに」

「はい。特に質問がないようなので、次に進みます」

そんな風に笑顔で言っ、るみねは自分の鞆から一本のペン

いや、ペン型の懐中電灯を取り出した。

「これは私が自作したペンライト。ちなみに電池は入ってないわ」と、言ってからライトのボタンを押す。すると、前置きに反して言うべきか、前置き通りと言うべきか、その先端が白く輝いた。

「おお、光った。電池入ってないのに」

「それは、これに『周囲の光エネルギーを集約して放出する』という『光』属性の方式を組み込んであるから」

プロクラミング  
もちろんそれを方式構築したのも私、とるみねは自慢げに笑う。

「だけど、これには一つ弱点があるの。それは、周囲に光エネルギーがない状態　つまり真っ暗な状態では使えないってこと」

「いやいや、それじゃあ意味ないじゃん。暗い所で使うためのライトだろ？」

「その通り。だから、そういうときには『これ』を使うの」

と、次みるみねが取り出したのは、ペンライトより一回り細い

「電池？　結局、電池を使うの？」

それじゃあ魔法科学の意味ないじゃん、という素直な感想を述べる春吉。しかしそんな生徒を「説明は最後まで聞きなさい」と、るみね先生は優しくたしなめる。

「これは、電池は電池でも『光』の電池。この中には圧縮された光エネルギーそのものが入っていて、そのエネルギーを使って方式をプロクラム作動させるの」

もちろん他の属性の電池もあるわよ、と残り四つを鞆から取り出し、順番にテーブルへと並べるるみね。

すると、その内の一つ　『火』の電池を手に取り、様々な角度から眺めながら、

「はぁー、やっぱり便利だな、魔法科学って。何でもできるんだな」  
本当に『魔法』みたいだ。

と、春吉は口にした。

しかしそれに対し、るみねはすぐに否定の言葉を並べる。

「別に何でもはできないわよ。既存の科学と区別するために『魔法

科学』って名前だけで、これはあくまでも科学。当然、エネルギー保存の法則や、質量保存の法則にも深く関わっているから、魔法みたいに何も無い所から何かを生み出すことは不可能」

現実には漫画や小説みたいにはいかないのよ、と。

きつぱりと、矛盾に頭を悩ませるようなことなく、るみねは言った。

だから春吉は「なるほど、つまり」と、ここまでの授業の結論を出す。

「スカートをめくる風を作るためには、どこから運動エネルギーを持ってこないといけないんだな？」

「ええ。理論は合ってるけど、目的がこの上なく間違ってるわ。というか、普通に軽犯罪だからね、それ」

との、るみねの言葉に、

「ちよつと待ってくれ。軽犯罪とは聞き捨てならないな」

と、春吉。

「スカートめくりにかける僕の情熱が、軽犯罪で済むわけがないだろうっ！」

「自ら罪を重くするの!？」

「母さんが言ってた。『深い愛は時として罪だ』と」

「深くないから。アンタの愛は、家族仲良く潮干狩りできるくらい浅いから」

「いやあ、そんなに褒められても」

「褒めてないし! アンタに褒めるところなんか一個もないし!」

「いやあ、そんなに罵られても」

「何故に満面の笑み!？」

藤春吉。どうしようもないくらいにM、略してDMだった。

残念かつ無念だが。

\* \* \* \* \*

『あらあら、もうこんな時間。春ちゃん、るみねちゃんを家まで送ってあげなさい。……いいのよお、るみねちゃんは気を遣わなくて男の子はね、女の子をエスコートするために生まれてきた生き物なんだから。それにほら最近、火事が続いているじゃない？ あれって放火だつて噂もあるし、不審者を見かけたつていう話もあるから気を付けないと。女子高生が帰り道に放火犯と出くわしちゃうなんて展開、小説とかでよくあるじゃない？ それにるみねちゃん可愛いから、放火犯をストーカーに転職させちゃうかもしれないし。放火犯のハートに火を点けちゃうかもしれないし　つて、今私うまいこと言わなかった？ ……やだあ、幸ちゃんつてば正直者。そんな本当のこと言つたつて、時給五十円しかアップしてあげないわよ。つて、やだやだごめんなさいね、私の長話で引き止めちゃつて。よく言われたのよお、九官鳥みたいによくしゃべるやつだつて。失礼しちゃうわよねえ、こっちは人間なんだから鳥よりしゃべるに決まつてるじゃない。……つて、また話続けちゃつてるわね、私。ホントごめんなさいねえ、るみねちゃん。でも、これに懲りずにまた遊びに来てくれたら嬉しいわ。ということで、喫茶パトリニア店長・女郎花でした』

「正直、アンタに送ってもらう方が危険な気がするんだけど……」  
赤から紫、紫から青へと移っていく空。今日も雲は少なく、ちらほらと星が見え始めている。

そんな空の下を、るみねは歩いていて。しかし彼女が近道として選んだこの道だったが、人通りはまるでなく、二つの意味で危険な道だった。

もちろん、その隣には

「安心してくれ。こう見えても僕は、空手を三日だけ習ったことが

ある」

「ありがとう。その発言によってますます安心できなくなっただわ」

「ご存知、危険人物　じゃなくて、春吉。」

「というか、不審者ってアンタのことじゃないの？」

「むむ、失礼な。そんな風に呼ばれるようなことは、まだしてない」

「まだってことは、これからする予定はあるのね」

「それに、僕はストーカーよりスカートになりたい」

「疑ってごめんなさい。アンタは不審者じゃなくて変質者だったわ」

そう言って、るみねは春吉から距離を取った。

男女の微妙な距離。しかしその間に恋愛的要素は一切存在しない

し、彼女としてはクラスメートの要素も存在してほしくなかった。

だけど、そんなるみねの気持ちに気付くこともなく、そういえば

さ、と彼女のクラスメートが言う。

「袴田って、何でそんなに魔法科学に詳しいんだ？　まだ授業も始

まってないのに」

さっきのペンライトとかよく作れたよな、と感心する春吉を見て、

るみねは待ってましたと言わんばかりににんまりと微笑んだ。

「実はね。私のパパ、魔法科学者なのよ」

それも。

「『命』の魔法科学の第一人者」

「……『命』？」

聞き慣れない単語に春吉は首を傾げる。さすがの彼でも、教えて

もらったばかりの魔法科学の基礎中の基礎は覚えていた。

魔法科学のジャンルは『光』『火』『風』『雷』『地』の五つ。

先ほどのるみねの授業には『命』なんて属性は一度も出て来ていな

かった。

もちろん、そんな風に春吉が疑問を抱くことを見透かして、るみ

ねが続ける。

「生き物　特に人間ってさ、どの属性のエネルギーで動いてると

思う？」

「んー……色々、じゃないの？」

特にこれっていうのはない気がする、と言う春吉に、アンタ意外と勘は良いよね、と感心するるみね。

「正解は五属性全部。全エネルギーを状況によって変換しながら動いているのが、生きてるのが、人間。そして、そのエネルギーの流れを操作するのが『命』の魔法科学。つまり全ての属性を一つにまとめたのが、『命』という属性」

「へえー。……ん？でも、そんなの教科書には載ってなかった気がするんだけど？」

「研究途中の新ジャンルだから、今はまだ確立してないのよ。だけど、近い将来絶対に教科書に載るわ。もちろん、第一人者として私のパパの名前もね」

と、るみねは満面の笑みで誇らしげに胸を張った。

「だからその手伝いをするために、私はずっと独学で勉強してきたってわけ。ちなみに、パパの専門は再生医療でね。失った体の部位を再生させたり、新しい臓器を作り出したり、ダメになった神経を修復したりとか、って言っても、アンタじゃよく分からないわよね」

「いや、大丈夫。なんとなく分かった」

「なんとなく、ね」

るみねが小さく苦笑する。『今度は一体、どのくらいの割合のことだろう』と。『春吉の？なんとなく？ほど当てにならないものはない』と。

結局、春吉の理解度の低さと、訳の分からない質問の連発（主にスカートめくりとパンツに関する）のせいで、魔法科学の基本を教えるだけで日が暮れてしまった。

第一、今日は皮肉にも同じクラスになった学年一位・崎守幸路を尾行し、彼が一人きりになったところまで宣戦布告？するつもりだったのに。あわよくば彼の勉強法を盗み見　いや、参考にしようと思っていたのに。

それなのに何故、このバカの勉強に付き合わされてしまったんだろう？

「さすがは学年トップクラス」

「やっぱり袴田は頭が良いな」

「袴田は声も良いな。できればその声でもっと罵って」

なんて、当たり前前のことを当たり前前のように言われただけで、何で先生役を買って出ってしまったんだろう？

まったく。そのせいで今日の勉強スケジュールは完全に狂ってしまった。

こんなことじゃ、入試で満点を取るような相手に勝つことなんてと。

辿り着いた思考の先で、るみねの頭には一つの疑問が浮かんだ。

「ねえ、アンタに変な質問するんだけどさ」

「む？ 僕の勝負パンツの色は赤だけど？」

「一生役に立たない情報ありがとう。で、本題だけど、崎守くんって入試前からあそこでバイトしてるわけじゃないわよね？」

「うん、違う。えーっと、確か……三日前からだったかな」

僕がちょうど下着と水着の違いに悩んでいたときだったから、と付け足された一言はスルーして、るみねは『そりゃそうよね』と胸を撫で下ろした。

「バイトなんかしてたら、勉強する時間がないものね」

そんな環境で満点なんか取れるわけがないものね、と口にしようとした矢先、

「でも、中学の頃から新聞配達バイトはやってるらしいよ」

春吉はスルーできない一言を付け足した。

「何それ……それである成績だつていうの？ っつて、ちょっと待って。やってるっていうことは」

「うん、今も続けてる。だから、パトリニアは二つ目」

全然遊ぶ暇なくて大変だよねえ、と言う春吉の隣で、るみねは似



たような だけど全く方向が違うことを考えていた。

それじゃあ、本当に勉強する時間が全然ないじゃない。

次のテストでは、全力の彼に勝負できないじゃない。

「何で」

と、思わず口から言葉が零れた。

「何で、そんなにバイトしてるのよ？」

すべき相手を間違えた質問。

しかし、それはここでは正解だったかもしれない。本人にぶつけ  
るべき内容では、なかったかもしれない。

だから、あっさりと、さも当たり前のように、

「だって幸路の家、貧乏なんだから」

春吉は答えた。

「僕と同じ母子家庭で、お母さんが病弱であまり働けない上に、妹  
さんがまだ中学生だから結構家計が厳しいみたい」

「……………」

「だから高校生になったから、バイト増やしたんだ。ほら、中学生  
って新聞配達くらいしかできない んでしょ、確か？ 本当は高  
校行かずに働きたかったみたいんだけど、お母さんにどうしても  
高校は行ってくれて反対されたんだって」

「……………」

そつだ。確かにあのとき『余裕がないからバイトしてる』と彼は  
言っていた。

あれは勉強面での余裕ではなく、生活面での余裕だったんだ。

そう思い至ったるみねに、さらに決定的な一言が続く。

「だから 入試で一位になった。特待生入学で学費全額を免除に  
した。やっぱり学年トップクラスは、僕なんかとは意気込みが全然  
違うや」

と、春吉は感心するように苦笑った。

しかし、隣を歩くみねの表情が変わることはなかった。

学年トップクラスというのは、トップではないということだ。

一位と二位じゃ、まるで意味が違つう。

重みが違つう。

価値が違つう。

込めた想いが 違つう。

『次のテストでは絶対に負けないからっ！』

何よ、その台詞。

対戦相手のことを何も知らないで、何が？宣戦布告？よ。

全力の勝負なんて、私が言えるような言葉じゃない。

私なんて、わがままで、世間知らずで、子供っぽくて

「 バカみたい」

「む……確かに。これは勝手に人に話していい内容じゃなかったな」  
できれば聞かなかったことにしてくれ、と珍しく真面目に春吉は  
手を合わせた。

だから、そんな春吉を見て、

「……いいわよ。そのくらい別に」

と、るみねは言った いや、言ってみた。

実際、聞かなかったことにしたかったのは彼女の方だった。あの  
言葉を取り消せない以上、それ以外の手段がない。そうじゃないと、  
明日から彼に合わす顔がなかった。

春吉の勘違いが、ここでは何よりありがたかった。

しかし、そんなことなど全く知らない春吉は「ありがとう。さすが  
袴田、話が分かる」と、満面の笑みを浮かべた。

「あのさ。ついでと言つては何だけど、もう一つ聞いてもらいたい  
お願いがあるんだけど」

「何？ 一応、聞くだけ聞くけど」

「パンツを見せてはもらえないだろうか？」

「逆に訊きたいんだけど、アンタはその質問をして恥ずかしくない  
の？」

「大丈夫だ。ことわざにもあるだろう、『聞くは一時の恥、聞かぬ  
は一生の恥』と」

「内容にもよると思いますけど!?!」

「で、見せてはもらうことは?」

「できませんけど。可能性の欠片もありませんけど」

「な、何故だ!?! 僕のこの進む情熱が伝わっていないというのか!?!」

「安心して。進り過ぎて先走り過ぎてくるくらい、ちゃんと伝わってるわ」

それはもう怖いくらいの熱伝導率よ、と微妙な距離から確実な距離へと変更するみね。

正直、この人通りのない道を選んで正解だったかもしれない。

こんなバカな質問をされているところを誰かに見られたら 聞かれたら、こっちが恥ずかしい。

聞かされるは一時の恥、聞かれるのは一生の恥。

そんなことわざ、このバカを相手にする場合にはあってもいいかもしれない。というか、なくては困るくらいだ。『あの子、巻き込まれて可哀想になぁ』とか思ってもらわないと。

ただでさえ、バカみたいな灰色の髪が目立つんだから。

と、思ったときだった。

春吉の髪に負けず劣らず、目立つ色がるみねの目に映った。

夕闇に輝く、金の髪と碧の瞳。

そして燃えるように鮮やかな、赤いロングコート。

一瞬にして曲がり角へと消えていった、その美しい顔は笑っていた。

何か、楽しいことがあったかのよう。

何か、楽しいことが これから起こるかのよう。

るみねがこの道を近道として選んだのには理由がある。

もちろん、それは距離的に近いということもあるが、それだけではない。

この時間帯、大きな通りは帰宅する人々で溢れかえっている。人より歩くのが少し速いみねにとって、それは大きな障害と言っても過言ではなかった。

しかし、この道にはそれがない。大きな通りとは正反対に、この時間帯になると障害が一切なくなる。

人通りがないから まだ、人が通るべき道ではないから。

この道は現在、全面的な補修工事中で通行が許可されていない。とはいえ、工事はほぼ終わっており、人が歩けない状態というわけではない。

さらに、この時間になるとその日の作業は終了となり、工事関係者もいなくなる。

つまり今この時間、この道は完全な無人になるということである。そして、彼女は役に立たないものは使わない主義であるのと同時に、使える物は何でも使う主義であった。

だからこの道の存在を知っていたるみねは、この使える道を選んだ。

もちろん、無断で勝手に堂々と。

だから、この道で人を見かけて気まづくことになることはあっても、わざわざその人の後を追うようなことはしない。

しない はずだったが。

「……あれ？ いない」

「袴田の見間違いだったんじゃないの？」

そこは行き止まり。工事用の道具が並ぶ、広めの空間だった。

そして、どこにも人の姿はなかった。いくら薄暗いとはいえ、あの目立つ色を見落とすような場所ではない。

「いや、そんなことない。確かに見たのよ 『赤い女』を」  
赤い女。

野々原市で連続して起きている不審火が、放火じゃないかと噂される原因。火事の現場に必ず現れると言う、金髪碧眼の赤いコート  
の女。

そんな話を、るみねは知っていた。しかし、そんな目立つ格好の人間が放火しているなんて考えられない。そんなのは、よくある噂や都市伝説の類だと思っていた。

だがしかし、彼女は一瞬ではあったがそれを目撃した。  
それも、こんな人気のない場所です。

連続不審火の共通点は、いずれも火の気のない無人の建物からの出火。

るみねの視界には 一軒の小さなプレハブ小屋。

「……あの中、見てみるわよ」

呟くように、るみねは意を決した。科学者としての探究心が、全ての可能性を確認したいと疼く。

「いや、やめとこうよ。ほら、先生も不審者を見かけたら近づくな  
って言ってたし」

しかしそんな彼女に対して、春吉は案外冷静だった。いや、バカ正直と言った方が正しいかもしれない。

だからフリードの言い付けをきちんと守り、ポケットに手を入れた彼は、

「ここは言われた通り、警察に連絡 を？」  
妙な声を上げた。

「……ケータイ、店に忘れてきたみたい」

「言つとくけど、私も持つてないわよ。家に忘れてきちゃったから」  
「それじゃあ、近くの公衆電話を探しに」

「そんなもの、今どき絶滅危惧種よ。ツチノコの方が見つつけやすい

わ。それに、探しに行ってる間に逃げられたら意味がない」

別にアンタは無理してついて来なくてもいいわよ。

そう言い残し、足音を立てぬよう慎重にプレハブに近づくるみね。その後ろを「いや、男子たるものそういうわけには」と春音が追う。

一歩一歩、息を殺し。

一歩一歩、気配を殺し。

一歩一歩、足音を殺し。

そうして目前まで近づいた直方体の建物は、一軒より一部屋と言った方がしっくりくるような大きさ。いかにも安っぽいドアが二つに、窓が二つ。当然ながら明かりは点いていない。

そしてその唯一の出入り口は、わずかに開いていた。

出て行った誰かが、閉め忘れたのか。

あるいは 中にいる誰かが、閉めていないのか。

「……………」

「……………」

顔を見合わせた、るみねと春音。今日初めて会ったばかりの、学年二位とバカの意見が一致した。

だから、考えていることを実行に移すべく、

私が、ドアを開けて、中を覗く

るみねはこれから取る行動を、体の動きだけで伝えた。

「……………」

こくん、と頷いた春音。それに軽く頷き返すと、るみねは慎重にドアノブを握った。

そして、少しずつ少しずつ広げていく 広がっていくドアと壁の距離。

いつ軋んでもおかしくない安っぽいドアが、手の動きと反比例するように彼女の鼓動を速める。

一瞬が一瞬とは感じられない。静かな空間に、自分の心臓が騒がしい。

だけどそんな騒音の中でも、るみねは音を立てることなくドアを

開き続ける。

そしてようやく生まれた隙間。それは、中の様子を確認するには十分なものだった。

「……………」  
一度呼吸を整え、心の準備を整える。体の内側から鳴り響くノイズは、もうすでに聞き慣れた。

だから覚悟を決めて、るみねがプレハブの中を覗き込んだ 瞬間。

「っ！」

彼女は思わず息を呑んだ。

覗き込んだ彼女の目に映った色は 赤。

赤い女の、赤。

捜していた、色。

だった が。

「……………な、何だ……………」

それは鮮やかとは到底言えない、薄汚れた赤。

同じものがいくつか積み重ねられた、赤いカラーコーンだった。

「誰も……………いないわね」

そう確認すると、るみねはドアを大きく開き、念のために中へと入る。そしてぐるりと一周、室内を見て回った。

簡素なデスクとパイプ椅子。プラスチック製のベンチが壁際に置かれ、反対側の壁には工事の予定が書かれたホワイトボード。入口の近くには、最初に目に付いたカラーコーンの束とダンボール一箱が、きちつと整理されて並んでいた。

そしてそれ以外には何もなく、誰かが 『赤い女』 が隠れられるようなスペースは、どこにもなかった。

「やっぱり、私の見間違いだったのかも」

不審者の話とかしてたからね、と苦笑するるみね。

所詮、噂は噂。実際そんなものに実体も正体もなかった、というのはよくある話だ。

だから少し腑に落ちない感じを残しつつも、振り返ったるみねの目に、

「……ん？」

きらりと赤い光が届いた。

それは、足下にぽつんと落ちていた小石。ルビーの原石に似た、赤い結晶だった。

気になって石を拾い上げるるみね。

よく見ると、石の表面には何かの模様が彫られていた。

あれ？ これって方式プログラムに似てるような……。

と、気付いたるみねを、

「いや、違うと思う」

宙を見つめる春吉は否定した。

「……何で、そう思うのよ？」

「香水の匂いがするんだ。だから、ついさっきまで誰かがここにいたのは間違いないと思う。それも匂いの種類の多分、女の人」

袴田は見間違っ  
てないと思うよ、と鼻を軽く鳴らしながら言う春吉。

「あ、なんだ、そっちの話か」

拍子抜けといった感じの聲が、るみねから出る。てっきり石の模様のことを否定された  
と、彼女は思っていた。

しかし、次に入るみねは小首を傾げた。鼻を利かせてみるが、春吉の言う香水の匂いなんてまるで感じられない。それどころか、土っぽ  
い匂いが強くてそれを嗅ぎ分けられるような場所じゃない。

だけど春吉は、はっきりと言い切った。絶対的な自信があるように。

そして続けて、彼は言う。

「それに、ここはなんとなく嫌な感じがする」と。

『なんとなく』という、実に当てにならない言葉を。

だから、るみねが「今度の『なんとなく』はどのくらいの割合？」



なんて冗談交じりに訊こうとした瞬間

『仕上げまでは、できるだけ穏便に済ませたかったんだけどね』  
どこかで、誰かが笑った。

とても楽しそうな、歪んだ喜び。

何故ならこれから、大好きな色が見られるから。

この世界を焼き尽くすための 復讐の紅蓮が。

「 熱っ！」

口にするのと同時に、るみねは反射的にそれを投げ捨てた。

突然真っ赤に光り出した、小さな何か。

それがユラユラと陽炎を纏いながら、光の軌跡を宙に描く。

「 っ！？」

るみねの声に驚きながらも、彼女の手から離れたそれを目で追う春吉。そしてそれが顔の真横を通り過ぎていくとき、その正体が何かを理解した。

それは、小石。るみねが拾い上げた赤い石だった。

そして赤く輝く石は春吉の横を通り過ぎた後、きちんと重力に従って放物線を描いて、彼の後ろに落ちた。

ぽとり、と軽い音を立てて ダンボールの上に。

「 なっ！」

「 えっ！」

石がダンボールに触れた瞬間 いや刹那、着地点が発火した。

そして一瞬にして、その炎はダンボールを包み込んだ。

しかも、その炎は異常なまでに大きく、どう考えてもすぐに鎮火するようないレベルじゃない。隣のカラーコーンが熱で少しずつ溶け始め、今にも燃え出しそうだ。

だけど、一番の問題はそこではなかった。

ダンボールの場所 炎の位置。

それが春吉の真後ろ、つまり二人が入ってきたドアのすぐそばで

あること。

唯一の出入り口を塞ぐように、炎が燃え盛っていることであった。「え、嘘、何で!? 燃えてる、すごい燃えてるし!」

水、消火器、と叫ぶるみね。

しかし、それらがここにはないことは、さつき室内を見て回ったときに分かっていた。分かっていたが 覚えてはいなかった。そんな記憶は、目の前で勢いを増そうとする炎によってかき消されていた。

「袴田」

春吉が呼んだ。その声は口にした相手とは対極に、冷静そのものだった。

「ちよっとこれ持ってて。燃えるとまずいから」

言うのと同時に、炎と向かい合ったまま、春吉は後ろに何かを投げ渡した。

慌てて というより反射的に、るみねがそれを受け取る。それは、彼がいつの間にか脱いでいた制服のブレザーだった。

そして、春吉はそんな薄着のまま

「いただきますっ!」

ダンボールに覆い被さるように、燃え盛る炎を全身で抱きしめた。そして微動だにせず、それを抱きしめ続けた。

「……………」

目を丸くしたるみねは、とうに言葉を失っていた。

全てが意味不明だった。突然、炎が上がったことも。それに対し、春吉が取った行動も。それによって、炎があつという間に消えてしまったことも。

「もう大丈夫。僕が全部食べたから」

そんなことをしておきながら 平然と立ち上がった彼の姿も。

「……………」

彼は、火傷一つ負っていないかった。服さえも、焦げていなかった。しかしその代わりに、消した炎の代わりのように、まるで熱した

鉄のように。

顔も、手も、白いシャツに包まれた上半身も。全身の肌が、赤くぼんやりと輝いていた。

そして、彼の体を走る無数の赤いラインは。

血管のように浮かび上がった複雑な模様は。

間違いなく プログラム 方式、だった。

「ああ、そういえば実はさ」

それは実にあっさりとした、ともすれば聞き逃してしまいそうな告白。

「僕、一回死んでるんだよ」

あれ？ これ、人に言っちゃダメだったけ？

と、首を傾げながら、春きはゲップ代わりに炎を吐き出した。

第四談。まさか、初めてがアンタなんて 1

「 というわけで、方式は大型プログラムであればあるほど操作できるエネルギーが大きくなります。ですがそれでは扱いにくいので、より効率の良い方式で小型化するのが……」

鈴ノ美山高校入学式の翌日、魔法科学科・一年F組。

新入生にとつての高校生活二日目であるこの日は、午前中は校内の施設を巡るオリエンテーションが行われ、昼食後は名門校と呼ばれるだけあつて早速授業が開始されていた。

そしてもちろん、魔法科学科である一年F組の授業とは魔法科学である。F組のみならず魔法科学科に入学した生徒は皆、この授業を受けることを心待ちにしていたと言つても過言ではない。

だから、もう間もなく放課後になるという時間であつても、F組の面々は集中力を切らすことなく真剣に授業に取り組み、教室内はフリードの声とペンの走る音だけに包まれていた。

そんな中、誰よりも熱心に自分のノートに向き合う少女が一人。もちろん、その優等生とは

「 えーっと……袴田さん、授業聞いてます？」

「 あ、大丈夫です。ちゃんと聞き流してるので続けてください」

と、横を歩くフリードを一瞥することもなく、授業とはまるで関係ないことをノートに書き込み続ける、るみねのことである。

しかし、いくら優秀であろうと彼女は生徒であり、いくら頼りなさそうであろうとフリードは教師である。授業に集中していない生徒がいたら、注意するのが当然。それどころか平然と『聞き流してる』などと言われているのは学級崩壊にもなりかねない。

だからフリードは毅然とした態度で、

「 えーっと、あのー……邪魔してすみません」  
るみねの横を通り過ぎた。

そして彼女に言われた通り、授業を再開するフリード。もちろん、その姿に不安や疑問を抱く生徒はいない。昨日のホームルームで『この先生はそういう先生だ』と、クラス全員が理解しているからである。

だから特に何事もなかったかのように授業は続き、るみねもペンを走らせ続けようとした。

ピタリとるみねの手が止まる。書きたいものが書けない。

彼の体に浮かんだ方式が、思い出せない。

しかし、それも当然。混乱と驚きの中の記憶はあまりに曖昧で、何より彼女はそれをしっかりと見る時間がなかった。

昨日、あの後。

「……アンタ……一体何なのよ？」

炎を？食べた？と言う春香に対し、るみねはやつとその一言を絞り出した。

意味が分からないことが多過ぎる。理解を超える出来事の連続で、思考回路は停止寸前。

だけど、目の前で起きていることを訊かずにはいられない。訊かなければいけない。

一体、何が起きたのか。そして今、何が起きているのか。

何故、彼の全身に方式プログラムが浮かび上がっているのか。

そして

「一回死んでるって、どういう意味よ？」

そんな疑問を、真っ直ぐな瞳と共にぶつけた。

しかし、それに対して春香の瞳は、

「ぼ……僕、そんなこと言った？」

マグロさながらの速度で泳いでいた。そうしなければ死んでしまう。殺されてしまう、と言わんばかりに泳ぎ続けていた。

「言ったわよ。そして確かにこの耳で聞いたわよ」

「な、何かの聞き間違いじゃ

」

「ないわよ。それに、たとえ聞き間違えたとしても、今現在見ているものを見間違えるわけがない」

るみねが春吉の体へと視線を移す。

赤く光り続けている体 決して普通ではない、人間の体。

それをしつかりと眺め、じつくりと見つめ、そして、

「アンタに今何が起きているのか、ちゃんと分かるように説明しなさい」

彼の目を見て、改めて問い詰めた。鋭い視線は今度こそ、春吉の瞳というマグロを銜のように射抜いた。

「え……つと……あの……」

まな板の鯉ならぬマグロ それも、冷凍マグロ。そんな瞳は身動き一つ取れずに、るみねの瞳と見つめ合う。

覗き込めば、消したはずの炎がそこには宿り、手に入れたはずの逃げ道が自分を追い詰めていた。

しかし、春吉はそれ以上言葉を続けなかった いや、続けられなかった。

自白寸前 というより、自白しようと彼が口を開いた瞬間。

突如として、鼓膜に突き刺さるような音が鳴り響いた。

それは異常な音量で、異常な事態を知らせる警報。音源は、プレハブ小屋の天井に取り付けられた火災報知機だった。どうやら先ほどの炎を、今頃になって感知したようだ。

「と、とりあえず逃げるわよっ！」

今さら鳴つても遅いわよ、とか。今大事なところなのよ、とか。

消火器はないのに何で報知機はあるのよ、とか。

そんなことを突っ込みたい気持ちは山々だったが、るみねの口から出た言葉はそれだった。

しかしそれは脱出という意味ではなく、逃走と言う意味。

鳴り続く火災報知機。黒く焦げたダンボールに、変形したカラーコーン。そして、プレハブ小屋に不法侵入している二人。

状況証拠は、二時間サスペンスさながらに揃っていた。

もしその流れでいくなら、良くて重要参考人、最悪、そのまま犯人扱い。どちらにせよ、このままここにいれば『ちよっと署まで来て頂きましょうか』は逃れられない。

「ただど入学初日に警察の厄介になるなんて　　というか、いつだろうとそんなことになるわけにはいかない。」

「将来有望な私の経歴に、こんなことで傷を付けるわけにはいかないのよ！」

結果、春吉の返事も待たずに、るみねはプレハブ小屋から一目散に逃げ出した。それはまさしく火事場の馬鹿力と呼べるような全力疾走。

「当然のように誰もいない道。寄り道などしなければ　　赤い女の姿など追わなければ、とつくに通り過ぎていたはずの帰り道を、スピードを落とすことなく一気に駆け抜ける。」

そして人通りがある道へと、彼女は何とか合流した。

「はあはあ……ここまで来れば大丈夫ね」

「乱れた息を整えながら、るみねは耳を澄ます。あの大きな警報音も、さすがにここまででは聞こえてこない。」

さらに幸いなことに、通行禁止の看板の裏から出てきた少女を不審に思う人間も、ここにはいない。帰路を急ぐ人々は、興味を示すどころか彼女に見向きもしていなかった。

「つまり、目撃者も不在。とりあえず面倒なことに巻き込まれることはないだろう。」

「だから安心して、」

「で、さっきの話の続きだけど　　」

と、るみねは隣に立つ春吉を見た　　はずだった。逆サイド、後ろ、そして今駆け抜けてきた道も確認するるみね。しかし、あのよく目立つ灰色の髪も、目立ち過ぎる赤く光る体も、彼女の視界には映らない。

「ということは」

「あのバカ、逃げたわね」

唸るように呟いて、るみねは春吉のブレザーを強く握りしめた。

\* \* \* \* \*

放課後。昨日の始業式とは違い、学校が終わる頃には太陽は大きく傾き、これから徐々に赤みを帯びようとしていた。

そして、そんな穏やかな西日が射し込む喫茶パトリニア。

「あら。お帰りなさい、春ちゃん」

扉を開く鈴の音に振り返った女郎花は、そう笑顔を見せた。

しかし、その笑顔に返事をしたのは春吉ではなく、

「こんにちは、女郎花さん」

ツインテールを揺らしながら、彼の後ろから顔を出したるみねだった。

「あら、るみねちゃん。いらっしやいませ。今日も来てくれたの？」

「はい。ちよつと春吉くんをお願いされて」

「お願い？」

「実は今日、授業でよく分からなかったところがあったみたいで、それを昨日みたいに教えて欲しいって頼まれたんですよ」

「あらあら、それでわざわざ来てくれたの？」

春ちゃんのためにありがとうね、と感謝を口にする女郎花に、「いえいえ、こつちも好きでやっていますから」とるみねは手を横に振る。

「で、勉強会に春吉くんの部屋を借りたいんですけど、大丈夫ですか？」

「そんなのもちろんよお。それどころか二階全部、るみねちゃんの好きに使っちゃって良いんだから。あ、それと喉乾いたり小腹が空いたらすぐ言ってね。私、何でも作っちゃうから」

「ありがとうございます。……えっと」



笑顔で会釈してから、何かを探すように店内を見回すみね。すると、彼女が何を探しているのか気付いた女郎花が、すかさずカウンター横にあるそれを指差した。

「そのカーテンの向こうに階段があるから、そこから二階に上がって。ちよつと散らかってるかもしれないけど、自分の家みたいにくつろいでいってちようだいね」

「はい、お気遣いなく。それじゃあ、お邪魔しますね」

「どうぞごゆっくり」

と、人目を遮るレースのカーテンの奥に消えていくるみねを、笑顔で手を振りながら見送る女郎花。

そしてその姿が見えなくなると、

「ところで、ずっと気になってたんだけど……」

と、帰って来てから無言だった少年に声を掛けた。

「春ちゃん、ブレザーどうしたの？」

今朝学校行くときも着てなかったわよね、と女郎花が尋ねる。

すると、象徴とも呼べるブレザーが欠けた制服姿の春吉は。

身を守る鎧を失った、あまりに無防備な一人の戦士は。

それでも戦わなければいけないと目を見開き、戦場の扉であるカーテンを見据え、言った。

「今から取り返しに行きます」

## 第四談。まさか、初めてがアンタなんて 2

七年前、事故があった。

と言つても、僕にはその時の記憶がほとんどないから、これは後から人に聞いた話になるんだけど。

確かに七年前、事故があつて 僕は、その事故に遭つた。

何台もの車を巻き込んだ交通事故。

動けない人や意識のない人が数多くいる中、事故の衝撃で流れ出したガソリンが炎上。現場は火と血の海と化し、それは地獄と表現する以外ない惨状だつたらしい。

そして当時九歳の僕は、その地獄の中心にいた。

どこから出血しているのか分からないほど血塗れで、腕や脚はありえない方向に曲がり、肌の一部には重度の火傷。ガラスや金属の破片が全身に突き刺さり、筋肉も神経も内臓も、あらゆる全てがズタズタ。

それは、瀕死というより臨死。呼吸も止まり、虫の息とさえ呼べない状態だつた。

十人中十人が諦める、それどころか救おうとすら思えないほど絶望的な命。

だけど、僕の母さんは十一人目だつた。

そんな地獄の中でも絶望しなかつたし、諦めなかつた。誰もが救う方法がないと考えるなら、誰も考えない方法で救えばいい。それが母さんの考え方だつた。

生き物としての機能をほとんど失い、修復が不可能なレベルまで重傷で重体だつた僕の体。それを普通に治そうなんてのは、無理で無謀で無茶な話だ。

だから母さんは普通じゃない方法で、僕の命を繋ぎ止めようと考えた。

母さんは僕に『魔法』をかけた。

当時はまだ定着し始めたばかりの魔法科学。あらゆるエネルギーを利用するその技術を使って、僕の体自体にプログラム方式を組み込んで、失った身体機能を補完するという方法に全てを賭けた。

もちろん、そんな治療法に前例はないし、勝率なんて存在しないに等しい。一秒でも判断に迷えば、一ミリでも手元が狂えば全てが終わるような、そんな賭けだ。

だけど、だから、だからこそ。

母さんは、それを選んだ。

わずかでも可能性があるのなら、科学者はそれを求めるべきだと。

そして

カウンター席の横の階段を昇ると、そこは居住スペースとなっていた。というより、この店は元々あった一軒家の一階部分を改装したもので、それこそが本来の姿だった。

一階と同様、シックに統一された家具が並び、まるでモデルルームのような雰囲気。しかし一方で、所々に置かれた鮮やかな小物たちが彩りを添え、そこは清潔感と生活感が混在する空間となっている。

そんな空間の一室。ベッドやデスクなど学生に必要なものが一式揃った部屋で、

「そして、僕は生き返った」

春吉はようやく自分のことを語り終えた。

求められた説明をし終えた。

だからそれを求め、聞き終え、しっかりと理解したツインテールの少女が、おもむろに口を開く。

「それって……『命』の魔法科学じゃないのよ」

小さなテーブルを挟んで、春吉と向かい合って座るるみね。そんな彼女の今日一日　いや、昨日の夜から抱き続けてきた疑問が一つ解決した。

しかし、るみねの表情が晴れることはない。その顔に浮かぶのは、驚きの色だけ。

今はまだ確立されていない、研究途中の『命』というジャンル。

もし春吉の話が本当だとするなら、彼の体に組み込まれたのは間違いなく『命』の方式。プログラムそれも、今の最高峰・最先端の技術を持つとしても不可能に近い　いつそ『魔法』で生き返したと言った方が分かりやすいくらい、非常に高度なものだ。

それが、魔法科学の理論が発見されたばかりの七年も前に考え出され、そして試されていたなんて信じられない。

「ただ確かに彼は生き延び、今も生き続けている。やっぱり。」

「やっぱり『命』の魔法科学は

「成功するんだ」

「確信するように、るみねはそう呟いた。」

『命』の魔法科学とは、医療と同じで繊細かつ複雑な分野だ。当然、その研究の前には法律や倫理の壁が立ち塞がり、結果が思うように発展・実用化されないのも事実。

しかしそれでも、彼女の父親は立ち止まることなく研究を続けている。自分の研究がいつか誰かの助けになると信じて。

だからこそ、るみねは父親を尊敬し、その道を共に歩むと決めた。魔法科学を学び、まだ見ぬ誰かを助けようとする父親を少しでも助けられればと。

そして今。

自分の目の前には『命』の魔法科学の成功例がある。『命』というジャンルが間違っていなかったと証明する存在が。

しかし、そんな喜びが口角に表れようとした瞬間、

「いや、成功は しなかった」

るみねの言葉を、春吉は否定した。

「成功しなかったって、どういうことよ？」

今アンタはしつかりと生きてるじゃない、と怪訝な表情を浮かべるみね。

春吉は昨日と同じく、制服のズボンと白いシャツにネクタイという格好。だから全てが見えるわけではないが、手や首や顔、そのどこにも傷跡は見当たらないし、それに何より彼は生きている。

どこからどう見ても『命』の魔法科学は成功している。

と、睨みつけるように自分の体を眺めるみねに、「いや、半分は成功かな」と春吉は答え、言葉を続ける。

「確かに、命を繋ぎとめることには成功した。だけど、事故から方式を組み込んでから三年間、僕は意識を取り戻すことはなかった。死んだように生き、生きながらに死んで、そして奇跡的に目覚めたときには、僕は十二歳になっていた」

それに。

「僕の体は治ったじゃ 失った機能を取り戻せたわけじゃない。体の外側はなんとか修復できたけど、内側は今も壊れたままだ。だからその代わりに、この『身近なエネルギーの吸収と放出』という方式の力を借り続けなきゃ、僕はすぐに死んでしまう」

だからコレを素直に成功とは呼べないし、母さんも呼ばなかった。そう、自分の胸に手を当て、少し俯きながら春吉は言った。

その顔はどこか悲しそうで、残念そうで、そして申し訳なさそうに、

「未完成で不完全な技術は、どんな危険があるか分からない。一人の命を救おうとして、十人の命を奪う可能性もある。だから安易に人に教えちゃいけない って、母さんに言われてるんだ。だからゴメン。この方式プログラムについて詳しくは教えられない」

目の前の少女に謝った。

そして、というか、と彼は言葉を続ける。

「人に教えられるほど、僕はこの方式のことプログラムをよく知らないんだ」「知らないって……自分の体のことよ？ アンタ、自分がどうやって生きてるのかも分かってないの？ それに いくら危険性があるからって、アンタのお母さんも本人にはしっかりと教えるべきじゃないの!？」

と、自分の母も責めるように言うるみねに、

「あ、いや、大丈夫。使い方はちゃんと分かっているし、教えてもらっているから」

春吉は慌てて付け足しの説明を始める。

「この方式プログラムは自律式だから、基本的には全て勝手にやってくれらんだ。……ほら、何がどうなって呼吸ができてるのか知らなくても、人間は何の問題もなく息を吸ったり吐いたりできるでしょ？」

「……まあ、確かに」

そうじゃないと、人間は生まれてすぐに窒息死だ。

「だからそれと一緒に、知識として僕は詳しく知らないけど、体の感覚としてちゃんと分かっている。呼吸の仕方も 深呼吸の仕方も」「深呼吸?」

その単語に引つ掛かり、疑問を口にするるみね。そんな彼女に春吉は「昨日のこと、覚えてるよね?」と、確認を取った。

「昨日のことって、アンタが炎を消したときのこと?」

「うん、そのこと。実は、この方式プログラムは自律式だけど、僕の意味である程度の強弱はコントロールできるんだ。だからそれを利用して、炎の熱エネルギーを吸収したってわけ 深呼吸みたいに、ね」

「……………」

疑問を解消すべく並べた言葉に対し、るみねからの反応は一切返ってこない。彼女は一人だけ時間が止まったように、一点を見つめ動かなかった。

だからそれに不安を覚えた春吉は、

「えっと……今のをパンツで説明すると、白と黒の」

「大丈夫よ。今の説明でちゃんと意味は通じたから」  
るみねに言葉を遮られた。

春壱が炎を消した方法。そして、春壱の体に浮かんだ方式。  
これで昨日、目の前で起きた全ての現象が理解できた。『魔法』  
のような出来事だったが、分かってしまえば魔法科学の分野。それ  
も『命』という、るみねの専門分野だ。

しかしそんな彼女にとっても、今回のことは驚き以外の何もので  
もなかった。理解はできても、驚きが消えるわけではない。

それどころか、知れば知るほど驚きが増していく。

そしてそれと同時に、春壱の体に組み込まれた方式プログラムに興味プログラムが湧き  
上がってくる。

確かに本来の目的は果たせず、失敗したかもしれない。未完成で  
不完全な存在かもしれない。

だけど、失敗から学べるものは絶対にあるはずだ。未完成で不完  
全なら、完成させて完全にすればいい。

きっとその先に『命』の魔法科学の未来が

と、そんな風にまた黙り込んでしまった彼女の様子を窺うように、  
再度春壱が話しかける。

「で、さ。これで僕の知ってることは全部なんだけど……」

「分かってるわよ、約束通りこのことは誰にも口外しない。それと

「  
そう言っつて、るみねは自分の脇に置いていた紙袋をテーブルの上  
に置く。」

比較的大きめの、若者に人気のシヨップの紙袋。それを持ってい  
ることが女の子にとっての一種のステータスになるような、そんな  
紙袋だ。

しかしそれに、散歩前の子犬さながら目を輝かせたのは、男の子  
である春壱。

そして彼は飼い主に飛びつくかのように、

「おかえり、僕のブレザー！」

紙袋を抱きしめた　はずだった。

「その前に、一つ条件があるわ」

ひよいと紙袋を持ち上げ、春吉の手を躲するみね。その顔は、今まで見たことがないほどの笑顔だった。

「じよ、条件とは？」

その笑顔に得体の知れない恐怖を感じながらも、春吉が訊く。すると「別に大したことじゃないわよ」と表情を崩さずにするみねは答える。

「ちよつと、服を脱ぎなさい」

「……………」

るみねの言葉を受け、春吉の知恵と知識が総動員でその意味を調べ始める。

そして三秒後、彼の導き出した答えは

「いや、あの……………僕にも心の準備というものが……………」

「安心なさい。断じてそういう意味じゃないわ」

アンタが今考えてることは何一つ合っていないわ、と顔を赤らめて身をよじる春吉に対して、至って冷静沈着なるみねが言う。

「私はアンタの体の方式プログラムが見たいって言ってるのよ」

「何だ、そんなことか。今日は勝負パンツじゃないからどうしようかと思つたよ」

「大丈夫。アンタが何をどうしようともどうしようもなくどうでもいいから、さっさと脱ぎなさい」

「はい、かしこまりー」

と、春吉はその場に立ち上がり、ベルトのバックルに手を掛けた。そして流れるような一連の動きで、ベルト・ズボンのフック・フアスナーを解放すると、一気にズボンを

「ストゥップっ！ アンタ何してんのよ！？」

「何って……………服を脱げって言うから」

「言つたわ、確かに言つたわ。だけど、下を脱げとは言っていない。それに何故、下から脱ぐのよ？」



「理由は簡単。何を隠そう、僕は下から脱ぐ派の人間だ」

「それは是非とも隠しておきなさい。そして早々に見えてるものを隠しなさい」

見えているそれを指差しながら、るみねはそう言っただけ顔を伏せる。先ほどとは逆に、今度はるみねの顔が真っ赤になっていた。

何で私がコイツのパンツ見なきゃならないのよ！ ていうか、普通このパターンは男女逆じゃない？

テーブルを凝視し続けながら、そんなことを心の中で呟くるみね。何とか春吉の脱衣（下）は、るみねの制止により未遂に終わった。だがしかし、ズボンから脱皮しようとする下半身の一部を、彼女は見てしまった。彼の言う通り、今日は勝負色の赤ではなく青だと判断できるくらいに、無駄で無意味な高解像度で。

実際これまで、るみねは数多くの告白を受けた。真剣な交際を申し込むものから、高嶺の花へのお試しチャレンジみたいなものまで。しかし当然、その全ての人とお付き合いしたわけではない。というより、彼女は誰一人として付き合ったことなどない。

幼い頃から父親に憧れ、勉強一筋だったるみねにとって、恋愛なんてものは不要な存在。もちろん一切の興味がなかったと言えば嘘になるが、それ以上に興味があつたのは魔法科学だった。

だからるみねには男性に対する免疫がない。男性の下着姿（未遂を含む）なんて、父親以外に直で見たことがなかった。

それなのに

「まさか、初めてがアンタなんて……」

「ん？ 何か言った？」

「言ったけど気にしなくて結構よ。また勘違いされても厄介だから「んー、よく分かんないけど分かった。で、言われた通りズボン履いたけど」

と、次の指示を仰ぐような声が、るみねの後頭部に掛けられた。

だから彼女は顔を上げながら「それじゃあ今度は上だけ脱ぎなさい」と言わなかった。

いや、言う必要がなかった。だからその代わりに、  
「何で上半身裸なのよっ!？」

半ば悲鳴にも似た声を上げ、緊急回避のためにぐるんと頭ごと視線を右旋回させた。

「何でつて……袴田が脱げて言ったんじゃないか」

「いや、違う。そういう意味じゃないのよ、そういう意味じゃ。ほら、一応、私にも心の準備ってものがあるわけだね……」

「心の準備　ってことはやっぱり……」

「大丈夫！　そういう意味でもないから！」

だからそのまま少し待つて、と春壱が視界に入らぬよう、真横を向いたままのるみねが言う。そして、グラグラと揺れる心を落ち着かせるために、目を瞑り自分に言い聞かせる。

研究対象。ただの研究対象。ただそれだけ。それ以外は何もない。

これは今後の『命』の魔法科学の発展のためにすること。誇れることであつて、恥ずかしいことでも恥ずかしがることでもない。恥ずかしがる必要なんて一切ないのよ、私。

目を開ける。心の準備は整った。

だからゆつくりと、るみねは目の前の春壱に視線を戻した。

顔に似合わず、案外引き締まった体。

それが春壱の上半身に対する、るみねの第一印象だった。

しかし、るみねがいくら集中して見ても、そこから第二・第三の印象は増えない。増えなければならぬのに、増えることはない。

「アンタ、<sup>プログラム</sup>方式はどこにいったの？」

顔や手と同様、春壱の体にも傷や傷跡は一つもなかった。おそらく『命』の魔法科学によつて、体の表面だけは完全に治せたのだらう。

だけど、その肝心な『命』<sup>プログラム</sup>の方式も一切見当たらない。昨日、シヤツの下から光つて見えた方式特有の模様は体のどこにもなく、それは至つて普通の人間の体だった。

すると、るみねの質問の意味を理解して、

「ああ。実はこの方式は昨日の炎みたいに、大きなエネルギーを吸収したときにしか浮かばないようになってるんだよ」

「じゃないと目立って仕方ないしね、と春吉は答えた。

「そう、なの……」

まあ、それもそうか。でなければ昨日浮かび上がった顔の方式が、プログラム今も見えているはずだし、そんなものが見えていたら日常生活に支障をきたす。

患者を診るような気分で春吉の体を眺め、るみねが納得する。しかし、見れないと分かれば益々見てみたいのが彼女の性格。

どうにかして、もう一度見る方法はないかな？ 昨日みたい  
に……。

そうやって思考を巡らすと、るみねの頭上で電球が閃いた。

「あ、そうだ。丁度良いものがあるんだった」

春吉のブレザーが入った紙袋に手を入れる。そして目的のものを見つけるとそれを手に立ち上がり、るみねはテーブルを迂回して春吉に近づいた。

「な、何で袴田、ライターなんか持つてるの？」

真横に立つたるみねの手元 蛍光色の安っぽいライターを見て、春吉が訊く。その表情はやや怯えており、体も自然と彼女から遠ざかっていった。

しかしそんな様子など気にも留めず「一応、もしものときのために持ってただけよ」とさらりと答えるるみね。

「もし、アンタが昨日のことを話すのを少しでも拒んだら、ブレザーに火を点けてあげようかと思って」

「僕のブレザー危機一髪！」

「感謝しなさいよ。ブレザーに油を染み込ませておくのは、ギリギリ思い留まってあげたんだから」

「燃やす気満々だったよね、それ！ だけど、とりあえずありがとうございまして！」

と、役割の入れ替わった会話が終わり、それで、とるみねが本題に戻す。

「この炎でアンタの方式を浮かび上がらせることはできない？」  
言って、とるみねがライターに火を点ける。

それは、昨日春吉が吸収した火柱とは比べようもないほどの、今にも消えてしまいそうな炎。それが持つ熱エネルギーは見た目通りしかし火を見るよりも明らかに、小さなものだった。

「うーん……これじゃ、ちょっと難しいかも……」

炎を見つめながら、春吉が首を捻る。正直、質問した当人もあまり期待はしていなかったので『やっぱり無理か』という表情を浮かべた。

だから今回は諦めようと、次はガスバーナーでも持ってこようとライターの火を消そうとしたとるみねの指を、

「でも、試すだけは試してみようか」

春吉の言葉が止めた。

そして気軽に　まるで暖を取るかのように、何の躊躇いも恐怖心もなく。

春吉が炎に右手をかざした、瞬間。

その、瞬間だった

「藤、袴田。これ、女郎花さんからの差し入……れ……」

ドアを開け、トレイ片手に幸路が部屋に入ってきたのは。

時間が止まる。幸路がりモコンを間違っただけで、一時停止ボタンが押されてしまったかのように、この部屋の映像が静止画となる。しかしその一方で、ここにいる全員の思考回路が全速力で状況整理を開始していた。

上半身裸で自らの手をライターの炎にかざす男子高校生　藤春吉。

そんな男子高校生の手を炙るような体勢で立つ女子高校生　袴田るみね。

そんな二人の勉強会に差し入れを持っていくよう頼まれた同級生

崎守幸路。

「……いや、違うんだ」

最初に口を開いたのは 春吉。

そして一人だけ動画に戻った彼が、こう続ける。

「安心してくれ！ 全て合意の上だ！」

だから何の問題もない、と春吉は幸路に力説した。

「そ、そうか。それなら問題ないな……。あ、あの、これ。ここに置いていくな」

女郎花の差し入れである、ミルクと砂糖が添えられた二人分の「ヒー」。

それを自分の足下に これ以上中に入っではいけないと悟り、トレイごと幸路は置く。その目つきは相変わらず鋭いものだったが、瞳が激しく動き回っているのは見て取れた。

そして逆再生のように部屋を出て、彼はドアを閉める。

閉まる寸前に、

「？勉強会？、邪魔して悪かった」

と、言い残して。

「……………」

幸路が歩き去る音、階段を下りる音が聞こえる。そんな些細な音がしつかりと聞こえるほど、この部屋は静かだった。

だから、ただ一人静止画の世界に取り残された彼女が目一杯息を吸う音も、それが限界まで達した音も、春吉にはよく聞こえた。

「ちがああああああああうっ！」

るみねの声に、ライターの炎が激しく揺れる。

そして彼女の心の何かと一緒に、儚く消えた。

第四談。まさか、初めてがアンタなんて 3

本当に優秀な人間は、気持ちの切り替えが早いという。

だから、るみねが立ち直るのにわずか十五分三十七秒しか掛からなかったというのも、頷ける話である。

「ダメだ……私の人生終わりだ……変態だと思われた……完全に変態だと思われた……」

と、呪詛のように というより呪詛を、部屋の隅に座り込んで呟き続けたのも、ほんの一瞬のことである。

ちなみにその間、部屋の主は沈黙を保っていた。

るみねが何故このような状態になってしまったのかは分からないが、それが正解だ。というか、それ以外は全て間違いだ。

本能がそう叫んでいた。だから脱いだシャツを着直し、ただ静かに 気配を消し、音を立てぬように、春吉は幸路が持ってきてくれたコーヒースプーンをすすっていた。

「……アンタさ」

「は、はいっ！」

突然ゆらりと立ち上がったるみねに、思わず身を竦ませ、声を裏返す春吉。

そしてそのまま硬直した彼に、彼女はゆっくりと歩み寄ると、

「しばらくの間、ここにいなさい。下に降りてきちやダメよ」

これまでに見せたことのない微笑みを見せた。

それは女神の美しさと、聖母の優しさを合わせ持つような表情。

しかしそんな笑顔を目の前に、春吉の脳裏によぎったのは『動くな危険』という警告の文字。

そしてその表情のまま「あ、それともう一つ」と彼女は続ける。

「もし誰かに余計なことしゃべったら、×××に×××××で××××××××してあげるからね」

オプションで××と×××××も追加してあげてもいいけど、春吉の横に置いてあった鞆を取るついでに、耳元で囁いたるみね。もちろん終始笑顔である。

「それじゃ、また明日学校で」

「……………」

るみねが爽やかに、にこやかに部屋を出ていく。またこの部屋に静寂が訪れた。

「……………」

ドクンドクンと、脈打つ心臓の音が聞こえる。

それを耳にして、春吉は再度実感する。

「……………あー、生きてるって素晴らしい」

「あら、勉強会終わったの？」

一階に下りてきたるみねに、真っ先に声を掛けたのは女郎花だった。

「はい、お邪魔しました。あ、それとコーヒーありがとうございます」

「別にお礼なんていいのよお。わざわざ春ちゃんに勉強を教えに来てもらってるんだから」

むしろこっちが感謝しないと、と女郎花が言いかけた瞬間、

「え、何？ この美少女、春吉のクラスメート？」

カウンター席に座っていた男が会話に割り込んできた。

「何だよ春吉のやつ、こんな可愛い女の子を部屋に連れ込んでやがったのか」

一見すればサラリーマンのようなスーツ姿の、三十代前半くらいの男性。しかし、スーツはもう何日も着続けているような感じで、髪はボサボサ・顎には無精ひげと、とても普通の会社員とは思えない。

「連れ込んだなんて、変な言い方するんじゃないの。るみねちゃん

に失礼でしょ」

本当にアンタは下品なんだから、と顔をしかめる女郎花。

しかし、そんな言葉には一切耳を傾けず　いや、一部だけはちゃんと聞き取って、

「へえ、るみねちゃんって言うんだ。やっぱり可愛い子は名前まで可愛いね」

男はるみねに微笑みかけた。

「俺は紫ノ村むら。『紫』に片仮名の『ノ』と、市町村の『村』で紫ノ村。春吉の育ての親というか良い兄貴分というか、まあそんな感じかな。ちなみに仕事はIT関係の社長やってます」

よろしくね、と紫ノ村がるみねに手を差し出す。

だが、すかさずその手を叩き払い、「今の全部覚えなくていいからねー、るみねちゃん」と女郎花は笑顔を見せた。

「平然と嘔吐くんじやないわよ、国家公務員。そして、どこの誰が『育ての親』に『良い兄貴分』よ。アンタは一ヶ月間、春ちゃんに悪影響及ぼしただけじゃないの」

「別に悪影響じゃねえよ。健全な男子なら誰しも通る道を教えてやつたんだよ」

「それを不健全なアンタに、高速道路レベルで教わったっていうのが問題なのよ。あーまったく、アンタになんか春ちゃんを預けるんじゃないかった……」

「はっ。男の道を踏み外したお前に、不健全だとか言われたくねえよ」

「ふん。こつちこそ男の道の意味を履き違えた勘違い男に、何も言われたくないわよ。大体アンタのその格好、リストラされたサラリーマンにしか見えないって分かってる？ どうせアンタのことだから、雑誌を鵜呑みにして『これで女の子のモテる』とか思ってたんでしょうけど、そんなの」

「あーあーあー、うるせえうるせえうるせえ！　会う度にギヤーギヤーと……やっぱりお前、九官鳥なんじゃねえの？」



「鳥以下の脳みそしか持ってないアンタに言われたくないわよ！」  
「ひーん、この人がいじめてくるよー。助けて、るみねちゃん」  
「どさくさに紛れて触ろうとするんじゃないの！ セクハラで訴えるわよ！」

そう言つて紫ノ村の額を叩き、「このバカがバカみたいにバカ騒ぎしてごめんなさいね」と本当に申し訳なさそうに、女郎花はるみねに謝る。

「あ、いえ、別にそんな……」

目の前で繰り広げられた二人の会話のテンションに、戸惑いを隠しきれないるみね。そのせいで、何か重大な事実を聞き逃したような気もする。

だけど、そんな彼女でも確かに分かったことが一つ。

崎守くんは、さっきの？勉強会？のことを、この二人には話していない。

性格上、彼はそういうことを他言するタイプじゃないとるみねは踏んでいたが、その予想はどうやら間違いないみたいだ。

つまり、あのことを知っているのは幸路一人だけ。彼の誤解さえ解ければ、全ての問題が解決するということだ。

だからそのために、るみねは決意と釈明（あれは『魔法科学のちよつとした実験』という、苦しいのは重々承知なもの）を胸に一階に下りてきた。余計なことを口走りそうな春巻を部屋に残して。

それなのに

「あれ？ 崎守くん……もう帰りました？」

この店に初めて来たときと同じように だけど今回はちゃんとキッチンも覗いてから、るみねが店内を見回す。しかし、やっぱり今回も幸路の姿は見当たらない。

「あら、幸ちゃん？ ごめんなさい。実はさっき牛乳切らしちゃつて、今お使いに行つてもらつてるのよ。あ、でもでも、多分もう少いで帰つてくると思うから、もうちょっと待ってみたら？」

本当にもうすぐだと思つたから、とカウンターの紫ノ村から二つ離

れた席を勧める女郎花。

しかしその提案を受け、るみねは瞬時に考える。

ここで彼の帰りを待てば、言い訳することに必死さが見えて、逆に怪しまれる可能性がある。

さらには、わざわざそこまでした用事の内容に女郎花たちが関心を持つてしまつかもしれない。そして最悪、春吉の口から余計なことだけが漏れるかもしれない。

だからその危険性を考慮して、るみねの出した答えは、

「あ、いえ、別に大した用事じゃないんで。それじゃあ、今日は遅くまで失礼しました」

さりげなくこの場を立ち去ることだった。

「あら、そう？ それじゃあまた来てね、るみねちゃん」

「それじゃあまた会おうね、るみねちゃん」

と、紫ノ村の顔面を驚掴みにする女郎花に軽く会釈してから、るみねはパトリニアを後にする。

空は完全に夜の色。るみねが携帯電話で時間を確認すると、昨日この店を出たときより少し遅い時間だった。

そっか……ちょうどこのくらいの時間か。

携帯電話がなかったから正確な時間は分からないが、大体昨日の今頃だろう。あの出来事があったのは。

そう思い返し、るみねが手元から記憶に新しいその方向へと視線を移したときだった。

その空だけが、明るく輝いているのに気付いたのは。

「どうやら、また火事みたいだ」

スーパーの袋を片手に提げた幸路が、そう教えた。

「な、何で……また……」

るみねの口から疑問が漏れる。

その瞳が見つめる先は 昨日、春吉の秘密を知った場所と同じ

だ  
っ  
た。

## 第五談。紅蓮の行方

赤と黒のコントラスト。

赤い炎が、自ら生み出した黒煙を照らし出している。

そして工事現場に設置された小さなプレハブ小屋は、今やその二色のためだけに存在していた。

「いやー、今日もまた豪快に燃えてますねー」

「……………」

そんな光景を、遠く離れたビルの屋上で眺める人影が二つ。

一人は、紅蓮のロングコートを身に纏った金髪碧眼の女。

もう一人はネクタイまで黒で揃えた、喪服のようなスーツ姿の男。こちらもまた、奇しくも眺めている光景と同じコントラストの二人だった。

「やっぱり炎つて、見てると何となくテンション上がりますよね。

実は私、子どもの頃は結構やんちゃで、よく火で遊んでたんですよ。実験と称して、色んなものを燃やしてみたりして」

遠くの炎を笑顔で眺めながら、台本を読むように淀みなく話し続ける黒服の男。

しかし、その表情からは　まるで仮面でも貼り付けているかのように変わらぬ笑顔からは、心というものが一切覗けない。そのため彼の感情も年齢も、そこからは読み取ることができなかった。

「あ、そうか。こういうのを『童心に帰る』って言うんですね、きつと。なるほどなるほど、これはまた一つ勉強になりました」

わざとらしく男がポンと手の平を叩く。すると、それと同時に炎が大きく揺らめいた。

「おお、ついに崩れちゃいましたか。まあ、あんなサイズではあつという間　　というか、むしろよく持った方だと称賛すべきですかね」

一昨日の一軒家は実にあっけなかつたですからねえ、と無表情の笑顔で笑う男。

そして炎の周りに群がる野次馬に視線を移し、彼は続ける。

「しかし今日も皆さん、お祭りみたいにいっぱい集まっていますね。やっぱり誰でも炎が好きなんですかね、私と一緒に。あ、それとも昨日のお祭りが急遽中止になったから、その分皆さん盛り上がり上がっているんですかね」

昨日は、本当に予想外のハプニングが起きちゃいましたからねえ。

と、男は肩を竦めて苦笑する。しかしその言動もどこか芝居掛かっ  
つていて、そこから彼という人間がまるで見えてこない。

どこかの誰かのようにでどこの誰でもない、人間から人間らしさを  
取り除いたような存在。

そんな彼が、ふと何かに気付いたように　しかし予定通りの演  
技のように「あれ？　そういえば」と隣の美しい金髪碧眼に顔を向  
け、問い掛ける。

「フレアさんは、日本語しゃべれませんでしたかね？」

「……………」

沈黙。遠くで鳴り響くサイレンの音がかすかに聞こえる。

しかしそれも長く続かず、何かを諦めたように、

「…………一応、ある程度はしゃべれるわ」

今まで無言を貫いていた赤い女　フレアは、嫌々ながらもそう  
答えた。

すると、相変わらずの表情の見えない笑顔で。

「だったら、相槌を打つくらいしてくださいよ。できますよね、そ  
のくらいは。じゃないと私が延々と一人でしゃべってる、頭のおか  
しい人だと思われちゃうじゃないですか」

感情のこもらない口調のまま。

「ああまったく、私が他人に質問することになるなんて　反吐が  
出る」

男は、確かにそう言った。

だけどそれに対して、小さく舌打ちするだけでフレアは何も言わない。もうこれ以上男の姿も見たくない、顔を背けるだけだった。もちろん、そんな彼女の反応を見ても男の態度は変わらない。自分の言いたいことだけを、淡々と話し続ける。

「では明日はミスのないよう、盛大なお祭りをよろしくお願いしますよ。私もそろそろ上に報告しないといけないので。あ、そうそう、上で思い出しました。もし何か必要なものがあつたときのために、フレアさんにも弊社のパンフレットを差し上げときますね」

そう言つて、男が足下のアタツシケースに手を伸ばす。しかしそれを「いいえ、結構よ」とフレアは鋭く止めた。

「？私たち？の目的は『科学の否定』　？あなたたち？の力はもう二度と借りない」

今もあなたと会話しているだけで反吐が出そうよ、と敵意を露わに男を睨みつけるフレア。

しかしそれに対しても表情を一切崩さず、男は「そうですか、それは残念です」と用意していた言葉を口にする。

「でもまあ、気が変わつたらいつでも言つてくださいね。弊社では多種多様な商品を扱っていますので、きっと満足していただけですよ」

男がアタツシケースを手に、フレアに背を向ける。

そして心のない言葉を残し、屋上から消えていった。

「それでは、お仕事頑張ってくださいね　炎の魔術師さん」

\* \* \* \* \*

「　　というわけで、『雷』属性の方式プログラムには通電性の高い金属を使

うなど、方式を描く素材によってエネルギー操作効率は大きく変わってきます。なので、より相性の良い素材を選ぶことが……」

鈴ノ美山高校入学式の翌々日、魔法科学科・一年F組。担任であるフリードの授業。

時間は昨日と違い昼休み直後ではあったが、これだけの情報があれば優秀なF組の面々には、これから何が起こるか予想するには十分だった。

そしてそれはもちろん、授業を行っている当人にも分かりきっていたこと。

しかし何度も言うようだが、フリードは教師である。いくら頼りなさそうに見えても、フリードも教師である。

だから目の前に教科書も開いていない女子生徒がいれば、彼は当然のごとく注意する。

「あの、袴田さん」

「聞き流してます」

鈴ノ美山高校には、図書室と呼べるものがない。

いや、正確には図書室と呼ぶ者がいない。

魔法科学には『光』『火』『風』『雷』『地』の五つのジャンルがあり、その一つをとっても利用方法は多岐にわたる。それ故、既存の科学と同様、もしくはそれ以上に、魔法科学には専門的な論文や参考書が膨大に存在し、その一部だけでも揃えたとしても、普通の学校の図書室の蔵書量を遥かに超える。

だから世界有数の魔法科学名門校である鈴ノ美山高校の図書室は、大きな建物一つがそれであり、その規模から誰もが図書館と呼ぶのである。

そして、時間は放課後になって間もない頃。そんな図書館の読書スペースに、ツインテールの少女と灰色の髪の少年の姿があった。

「昨日、また火事があったことは知ってるわよね？」

図書館ということを考慮した声のトーンで、るみねが訊く。すると、こくと春吉は首を縦に振った。

「昨日、幸路に聞いたし、今朝の新聞にもちよっと載ってた」

「じゃあ、どこで起きたかは知ってる？」

「いや、そこまでは……それがどうかしたの？」

「それがどうかしたのよ。昨日の火事の場所が　あのプレハブ小屋だったってことが」

私が見に行ったときには、もうすでに小屋のカタチじゃなかったけど。

そう言っ、るみねは昨日のことを思い出す。

遠くの空だけが明るいに気付き、幸路に火事だと教えてもらった直後、るみねは駆け出した。さすがに昨日と同じ全速力とまではいかないが、それでもかなりの速度で。

彼女には一つの心当たりがあつた。それこそ今まさに、その場所であつた出来事を思い返していたくらいだ。

だから、るみねの足は迷いなくそこに向かい、やがて彼女の目は大勢の人影を見つけた。

今日もまだ通行禁止のはずの道路で、携帯電話を手に集まる人々。しかしその目的は、るみねのように時間を確認するためではない。

人々は皆、携帯電話のカメラで目の前の火事を　燃え盛る炎を記録していた。

るみねがそんな彼らの隙間を縫って、炎へと近づく。だけどそれは周りの野次馬とは全く違う目的。

彼女は、どこで何が燃えているのか、その目で確認しなかった。そして炎上しているものが何か分かると

「何で……それが問題なの？」

と、疑問を口にしたのは春吉。

その火事の翌日、ほとんど訳が分からないまま、るみねに図書館に連れて来られた春吉だった。

「何で、って……一昨日のあのプレハブが燃えたのよ？　私たちが



何とか逃げ出したあそこが」

「うん、それは分かった。だけどそれが何かあるの？」

まるで意味が分からないといった感じの表情を浮かべる春吉に、  
るみねはため息を吐く。

「質問その一。私たちがあのプレハブから逃げ出したとき、火災報  
知機が鳴ってたことは覚えてる？」

「うん、覚えてる。うるさかった」

「質問その二。では何故、火災報知機が鳴ったんでしょう？」

「それは……ダンボールが燃えた、から？」

「正解。じゃあ質問その三。何であのダンボールは燃えたんでしょ  
う？」

「それは、袴田があの変な石を投げたから」

「そのニュアンスだと私が放火したみたいに聞こえるけど、まあ一  
応それも正解」

ここからは私の想像が混じるんだけど、と前置きしてから、るみ  
ねが答え合わせを続ける。

「あの石は多分、『火』の方式を使った時限式発火装置。まあ、詳  
しく見れなかったから、どいう方式構築だったかまでは分からな  
いんだけど」

ただどあのサイズであれだけの熱を、それも一瞬で発生させ  
るなんて、相当高度な方式だったに違いないわ。

「でもそれじゃあ、何故そんなものがあそこに落ちていたのか？」

答えは簡単。落ちてたんじゃない、置かれていた。いや、仕掛け  
られていたのよ」

「……なるほど」

「そして、ここで質問その四。それを仕掛けたのは、一体誰でしょ  
う？」

「多分、袴田が見たっていう『赤い女』」

確かに香水の匂いもしたし、との春吉の答えに「私もそうだと思  
う」と、るみねは深く頷く。

「だけどね　もしそうだとしたら、『赤い女』がまたあのプレハブを狙った理由が分からないのよ」

「それは……一昨日、僕が炎を食べたせいで失敗したからじゃないの？」

「だからもう一回やり直したんじゃないの、と春吉。」

しかしそれに、るみねは正解とは言わない。未だすっきりとしない表情で、彼女は首を横に振る。

「それはリスクが大き過ぎる。だって『赤い女』の噂で街中が警戒態勢の中、火災報知機が鳴ったのよ？　そんなの誰だって放火を疑うし、警戒をより強めるはず。そして『赤い女』もそんなこと分かってたはず。それなのに次の日、また同じところに放火した」

「えっと……そのどこが変なの？」

難しい顔をして、春吉が首を傾げる。今の説明がほとんど分かっていない様子だ。

「だからるみねは少し思案した後、彼にとって非常に分かりやすいであろう例で説明し直す。」

「例えば、アンタがスカートめくりに失敗して、それが相手にバレたとする。アンタはそんな状況下で、同じ相手にすぐ再チャレンジしようと思う？」

「むむ、それはなかなか厳しい戦いだな。スカートめくり六段クラスの実力が必要だ」

「スカートめくりに段位があつたとは知らなかったし知りたくもなかったけど、分かってもらえたようで何よりよ」

「だから、とるみねは説明を続ける。」

「普通そんなこと誰もしない。私が放火犯だったら全く別の、警戒の薄い場所を狙うわ。だけど『赤い女』は、それを無理してでも実行に移した。その理由がまるで分からないのよ」

と、るみねは頭を悩ませる。というか、悩み続けていた。

昨日の火事の後、彼女がネットで調べてみると『赤い女』の犯行だと思われるのは全部で六件。それも、七日前から毎日一件ずつ

ただし一昨日は失敗に終わっているので、昨日ので六件目だった。しかし、放火の対象に統一性や一貫性はない。一軒家からマンションのゴミ置き場まで、目に付いたものを手当たり次第といった感じだった。

なのに何故、昨日はあのプレハブにこだわったの？

そんな疑問が頭の中で渦巻く彼女に、ぽつりと、

「どうしても、そうしたかったんじゃないの？」

春吉は思いついた言葉を口にした。

「どうということ？」

「いや、もし僕がスカートめくりの再チャレンジをするなら、どうしてもその人のパンツが見たいんだろ？なあ、と思つて。だから、なんとなく」

「なんとなく、ね……」

しかし、春吉のこの言葉は時々当たる。勘だけは良い。

そう思い、るみねが考える。

どうしても、あのプレハブを燃やしたかった。

確かにその理由なら、昨日の『赤い女』の行動は理解できる。それこそ春吉の言う通り、失敗したからやり直したと言える。

だけどそんな理由で、わざわざ危険を冒してまで同じ場所を狙う必要があつたのか。今までは、放火の対象にこだわりなんて持ってなかつたのに。

いや、違う。今までも、何かのこだわりを持っていたのかもしれない。

それが今回の失敗で、見えるようになったのかもしれない。

一見、法則性がなく無秩序に見える『赤い女』の行動にも、本人には何かのこだわりが　ルールがあるのかもしれない。

そして、そのルールが分かれば

「もしかしたら次の犯行場所　　というか、今日の犯行場所を予測できるかもしれない」

そう言つて、るみねは自分の鞆から一冊の手帳を取り出した。

パステルブルーの手帳。それは彼女が閃いたこと・調べたことを書き留めておくためのメモ帳代わりであり、そこには昨日調べた火事の情報が書き込まれていた。

「えっと……最初の事件は、ちょうど一週間前。場所は、北区の……って、地図が何かあった方が分かりやすいわね」

ちよつと借りてくる、と席から立ち上がるみね。

都合良くここは図書館。野々原市の地図くらい、探せばどこかにあるはずだ。

しかしそんな彼女の行く手を遮るように、

「地図って、これでもいいか？」

後ろから薄い雑誌のようなものが差し出された。

聞き覚えのある声。それに見えは振り向き、声の主を見て驚いた。

「さ、崎守くん!？」

「袴田、図書館では静かに」

周りに迷惑が掛かる、と幸路にたしなめられ、みねは慌てて自分の口を塞ぐ。

だが時すでに遅し。それほど大きな声ではなかったといえ、ここは閑静な図書館。一瞬にして、みねにはいくつもの視線の矢が突き刺さっていた。

「……し、失礼しました」

気まずそうに軽く頭を下げ、椅子に腰を落とすみね。どこから、舌打ちする声も聞こえる。

そんな彼女に幸路は、

「悪い。驚かすつもりはなかったんだけど……」

と、図書館ということを十分考慮した声で謝った。

それに対するみねは、「い、いや、別に……むしろこっちこそ気付かなくてごめんなさい」と、音量は間違っていないが、音階が少しおかしい声を出した。

「……………」

この状況は、非常に芳しくない。

結局、今日一日のるみねは幸路の誤解を解くタイミングを見計らい続け、見定め続け、見極め続け、見逃し続けてしまっていた。

だから状況は、昨日から一向に良くなつてはいない。

それに加えて今この状況。新たな誤解を招かないようにと、今日は春吉の部屋ではなく図書館を、それも会話内容の問題で特に人の少ない一画を選んだのが、失敗だった。

二日連続。わざわざ人目を避けるような場所。顔を向かい合わせる二人。

これじゃまるで、私とこのバカが本当にクラスメート以上の関係に見えてしまう。

「あ、あのね」

これには深い訳があつて、と。

浮気現場を見られた彼女のように、るみねが言い訳しようとした矢先、

「それで、一応これにも地図が載ってるけど使えそうか？」

幸路は手に持ったそれを、再度差し出した。

それは『野々原の歩き方』 この学校の新聞部が発行しているフリーペーパー。学校近隣はもちろん、市内の様々な場所が紹介されているもので、当然地図も掲載されていた。

「あ、ありがとう。これで大丈夫だと思う」

「そうか。それは良かった」

そう言つて、相変わらずの鋭い目つきのまま『野々原の歩き方』を手渡す幸路。その様子はいつも通りの幸路であり、るみねが懸念する最悪の雰囲気はない。

「……………」

今ここで変に言い訳するのは、必死に見えてむしろ逆効果か。

るみねは優秀な頭脳で瞬時にそう判断すると（今日一日言い訳できなかつた理由）、ところで、ともう一つの心配事を幸路に訊いた。

「崎守くんはいつからここに？」

「ん？ 今、来たばかりだけど……もしかして邪魔だったか？」

二人の姿が見えたから声を掛けようと思ったただけなんだ、と立ち去ろうとする幸路を、「あ、ちょっと待って」とるみねが引き止める。

どうやらさつきまでの自分たちの会話は、幸路には聞かれていないようだ。

そう安心するとのるみねは、

「実は今、『赤い女』の行動パターンについて話し合っていたのよ、事実の一部 会話の後半だけを幸路に伝えた。

「『赤い女』って、最近の火事で噂になってるやつか？」

「うん、その噂の。それで『赤い女』の行動パターンが分かれば、今日の犯行場所を予測できるかもって話をしてて、良ければ崎守くんも協力してくれない？」

「なるほど、それで地図か。……分かった、参加させてくれ」

「ありがとう。で、この地図に印をしていきたいんだけど、書き込んでも大丈夫？」

「ああ、全然構わない。それは入口に置いてあったものをもらっただけで、俺は使わないから」

どうも無料の文字が見えると、何でも持って帰ってしまう癖があるんだ。

と、付け加えられた幸路の言葉に、るみねは何も言えなかった。

彼の言葉には皮肉や冗談のようなニュアンスはなく、それを言った本人も至って真面目で真剣な様子。

その一言は、春吉から聞いていた幸路の生活環境を、改めて実感させられるもので、

「次のテストでは絶対に負けないからっ！」

なんて言葉が、どれほど世間知らずなものか痛感させられるものだった。

だけ。

だけど、それについて自分が何か言える立場ではないし、言うべ

きでもない。そして何より、私たちには今やるべきことがある。そう気持ちを切り替え、るみねは赤いペンの先を地図に置く。

「最初の火事が　　この倉庫。二件目が、マンションのゴミ置き場。三件目が……」

手帳に書き写した住所と照らし合わせながら、丸印と順番を描いていくるみね。

喫茶パトリニアも紹介されている、グルメ&観光マップ。その上に、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、と。

そしてその手はまもなく、

「　　これが、昨日の六件目。工事現場のプレハブ」

六つの赤い丸を描き終えた。

「……バラバラ、だな」

出来上がった地図を眺め、幸路が率直な感想を述べた。

「放火したのもバラバラだし、場所もバラバラ。それも市内を端から端まで、気まぐれのように縦横無尽に……本当に、これに行動パターンなんてあるのか？」

「何か法則性があると思う　　いや、あるはず。『赤い女』にとつては重要な、ルールみたいなものが……」

とは言ってみたものの、るみねにもそれが何かはまるで分からない。

幸路の言う通り、六つの丸は市内のあちこちに点在し、それこそ毎日気まぐれに火を放ったと思っただ方が論理的だ。

「ただど昨日は、あのプレハブにこだわった。前日の失敗を取り返すように。」

何か、何か、何か。

何か、あるはずなのよ。

と。

ここで、るみねはあることに気付いた。

ただし、それは彼女が今抱えている難問　　目の前に散らばった、

六つの赤い丸のことではない。

それは、幸路が現れてから会話に参加してこなくなった人物。まるで主人公の座を奪われ、台詞もない村人Cになっただかのように、黙った人物のことである。

「アンタ、何でさっきから一言も発してないの？」

るみねの言葉に、幸路も春吉に視線を向ける。

「ん？　そういえば昨日から様子が変わったな、藤」

体調でも悪いのか、と心配する幸路に「あ、いや、その……」と、何とも歯切れの悪い答えを返す春吉。

そんな彼の態度を見て、少し苛立ちながらるみねが言う。

「言いたいことがあるなら、はっきり言いなさい。はっきりと」

「いや……だって、袴田が余計なこと言ったら××」

「あーっ、そのことなら忘れていいわよ、春吉くん。というか忘れなさい。忘却の彼方に消してしまいなさい」

「余計なこと？」

「あー、崎守くんも気にしないで。別に大したことじゃないから」

「……？」  
大きく手を振るるみねに、どこか釈然としない眼差しを向ける幸路。

「まずい、早く話題を変えなきゃ　というか、本題に戻さなきゃ。

しかしそんな彼女の焦りとは無関係に、

「あのさ、僕は本当に言いたいこと言っても良いの？」

村人Cが再確認　命の保証を求めてきた。

だから、悪の大魔王ではなく正義の女勇者であるるみねは、笑顔で彼に答える。

「ええ、もちろん。今言うべきことなら何でも」

その瞳から『余計なこと言ったらどうなるか分かってるわよね？』という氷魔法を放ちながら。

「あ、うん、大丈夫。これのことだから」

細かく頷く春吉。その姿は、寒さに震える小動物のようにも見える。



そして、これ、と地図を指差したまま、

「僕、前にどこかでこんなのを見た覚えがある……ような気がする」  
ついさっき許されたばかりの発言をした。

「どこかって、どこよ？ アバウト過ぎて何も分からない」

「えーっと……どこだっけなあ……」

頭を掻きながら、地図を難しそうな顔で見つめる春吉。

無数に存在する記憶の引き出し。ずいぶんと昔にしまった気がする何かを探し、春吉は懸命に　　とはいえ命懸けといった感じもな  
く、開けていく。

だから、ようやく見つけた目的の引き出しを実にあっさりと。

「あ、そうだ。思い出した」

昨日の夕食を思い出すくらいの気持ちで。

「　　これ、母さんが実験で見せてくれた方式プログラムに似てる」  
春吉は開けた。

「　　っ！」

全く同じタイミングで、るみねと幸路の視線がぶつかる。春吉の  
一言によって、二人の思考が一つの結論に辿り着いていた。

「嘘、でしょ。そんな……そんなはず」

ない、と信じたかった。今も心がそう願ってやまない。

七つの頂点を持つ、星のような模様。

魔法科学者なら誰でも知っているような、方式構築プログラミングの基本中の基

本。もちろん、るみねもよく知っているし、見慣れていると言っ  
ても過言ではない。

だが見慣れているからこそ、頭が最初から考えることを止めてい  
た。一種の先入観が、無意識にその可能性を排除していた。

しかし、それに気付いてしまった彼女の手は、自らの願いに反し  
てペンを走らせる。決して望まない模様を、描いていく。

地図上の赤い丸を　　火事があった場所を、一件目から二件目へ、  
二件目から三件目へと。

街を包囲するように繋がっていく赤い線。

そして、最後の六件目まで繋がったその形は。

未完成で不完全な、その模様は

「『火』の方式プログラム。それも、この形状は？発火？の方式構築かプログラム」

「いや、でも………プログラム 火事で方式を描くなんて方法聞いたことがないし、こんな大きな方式がそんな雑な方法で成功するわけない」

まるで怒っているかのように声を荒らげ、幸路の意見を否定するみね。

しかし口とは裏腹に、彼女の心も頭も彼と同じ意見だった。

もし『赤い女』が街そのものプログラムに方式を描こうとしているなら、全ての辻褄が合う。放火の対象に統一性がないのも、これなら説明できる。

何を燃やすかではなく、どこで燃やすか。

重要なのは場所。偶然そこにあつたから、必然的にそれに火を放つた。

だからそのルールを守るために 守らなくてはならないから、どうしてもあのプレハブを燃やす必要があつた。

だけ。

だけプログラム、方式というのは最先端科学の結晶であり、もつと緻密な計算の上に成り立つもの。大きければ大きいほど、ほんのわずかなズレが生じただけでも発動しなくなる。

だけ。

「プログラム だけど、もしこの方式が完成して、発動したとしたら 幸路はそこまで言つて、それ以上言わなかった。」

しかしるみねには、その先に続く言葉が確かに聞こえていた。

火事という『火』属性と相性の良い素材は、高いエネルギー操作効率を生む。

街一つ覆い尽くすほどの規模は、そのまま比例して一度に扱えるエネルギー量になる。

そして、この方式には『周囲の熱エネルギーを集め、発火する』プログラム という方式構築が組み込まれていて、その発動場所は 方式の内

側。

つまり、これが発動した場合に起こることは

「あつという間に、街が燃える」

そんな最悪の光景が、やけに現実味を帯びて彼女の脳裏を過ぎる。

「そんなことさせない。今日の放火を プログラム方式の完成を、絶対に止めなきゃ」

るみねが、地図に視線を落とす。

今までの六件の放火場所を繋いだ赤い線。それが今、るみねの前にある未完成の方式。プログラム

七つの頂点を持つ、星のような模様。それが今、『赤い女』が目指しているはずの方式。プログラム

つまり七件目 次の場所にあるものが、最後の標的。

そして、その場所は

「?ここ?だ」

そう言つて、幸路が地図のある一点を指差した。

新聞部編集のグルメ&観光マップには、名前は書いてあるが紹介されていない いや、紹介する必要のない場所。

るみねもよく知つていて、だけどまだ通い慣れたとは言えない場所。

「 鈴ノ美山高校」

それは、彼女たちが今まさにいる?ここ?。

この学校こそが『赤い女』の今日の標的であり、これまでの犯行の目的地。

そして、この街を守る最後のチャンス。

今までに感じたことのない胸騒ぎが、るみねの心を急かしたそのときだった。

「袴田……法則性はもう一つあった」

それに気付き、幸路ができるだけ冷静に言ったのは。

「今までの犯行は、全て日没直後だ」

るみねが図書館の窓に目をやる。

そこから差し込む陽光は、すでに赤みを帯びていた。

## 第六談。あなたの魔法の使い方は間違ってる

1

「確かに袴田の言う通り、こんな巨大な方式プログラムが発動する可能性は極めて低い。だが可能性がある以上、見過ごすわけにもいかない。だから、俺はこのことを先生たちに伝えて、判断を仰ごうと思う。藤と袴田は、念のため避難しておいてくれ」

人目を気にする余裕もなく館内を駆け抜け、るみねたちが図書館を飛び出すと、空のキャンバスは一色に染まっていた。

それは、これから起こることを暗示するような色。

鮮やか過ぎて気味の悪い 赤。

だが、キャンバスが塗り替えられるまで、残された時間は少ない。自分たちの予想が正しいなら、この街のタイムリミットは確実に迫っていた。

だから、走るるみねの口から、

「 時間が無いっ！」

焦りの言葉が零れた。

しかし、それに脱出や逃走と言う意味は含まれていない。図書館で別れた幸路には避難するようにと言われたが、彼女にそんなつもりは一切なかった。

確かに自分が否定した通り、『赤い女』の計画が成功するとは思えない。あんな方式プログラムが発動するのは、最悪の偶然が最悪にも揃ったときだけだ。

だったら、最悪を恐れるより最善を選べばいい。『赤い女』を見つけて出して犯行を阻止すれば、最悪の可能性は全て消滅する。

そして、それに何より

「みんなを残して、一人で逃げられるわけがないじゃないっ！」

パパは今頃、まだ研究室で頑張ってる。ママは多分、家で晩ご飯の準備をしている。

女郎花さんは間違いなくパトリニアにいるだろうし、放課後になってもこの学校にはまだ多くの人が残ってる。

そんな状態で、一人で避難なんてできるわけがない。

たとえ今から全員で街の外に避難しようとしたとしても、全員は間に合わない。むしろ、間に合わない方が、圧倒的に多くなる。

だから？もしも？なんて、あつてはならない。

その思いが彼女の足を突き動かし、瞳が一度だけ見たあの色を追い求めた。

さつき分かったことは、今日『赤い女』が狙うのは鈴ノ美山高校ということだけ。学校のどこが標的となっているかまでは、あの地図では分からなかった。

しかしそれに対して、鈴ノ美山高校は広過ぎる。

普通科と魔法科学科にそれぞれの校舎があり、体育館や室内プールなどの運動施設や、図書館から各部活の小さな部室まで、探すべき場所は無数に存在する。

だから幸路と別れた後、

「アンタは普通科、私は魔法科学科の方を探してみる！ 見つけたらケータイに連絡！」

「了解、任された！」

るみねと春きはそうエリア分担して、二人も図書館の前で別れた。そして

「一体、どこを狙うつもりなのよ……」

とりあえず魔法科学科の校舎の前に辿り着き、るみねは一度足を止めた。

自分の使っている校舎が、真っ赤に染まっている。その光景が、彼女の瞳を焦がすように焼き付く。

携帯電話を取り出し、着信を確認するるみね。

しかし、今さつき別れたばかりの春きから、連絡が来ているはず

もない。だけど、今にも零れてしまいそうなほどの焦りに満ちた心は、そうせざるを得なかった。

さあっと一陣の春風が、彼女のツインテールを撫でた。だが、それに昏間のような暖かさはなく、確実に夜が迫ってきていることを知らせる。

崎守くんの方は、どうなったんだろう？

今この学校で この街で起きようとしていることを、先生たちに無事伝えられたらどうか、と。

手にした携帯電話を見て、るみねはもう一人奔走している彼のことを考えた。

しかし向こうの状況を聞く術を、残念ながら彼女は持っていない。幸路の番号を知らないから、るみねには連絡を取る方法がなかった。というか第一、彼が携帯電話を持っているかどうかも分からない。

だけど、と。

るみねは周囲を見回し、見渡す。

少し遠くに見える広々としたグラウンドでは、野球部とサッカー部の練習が行われている。

窓から煌々と明かりが漏れる体育館からは、スニーカーが擦れる乾いた音が。校内のどこかからは、吹奏楽の音色と誰かの楽しいげな声が聞こえる。

鈴ノ美山高校は、平和そのもの。数多くの学生が、思い思いの放課後を過ごしている。

そして。

今のところ誰一人として、この学校から避難しようとする人間はいない。いや、それ以前に避難の必要があると知っている人間がない。

自分たち、三人を除いては。だから

「私たちが何としても『赤い女』の計画を阻止しなくちゃ」

たとえ方式が失敗に終わるとしても、今日この学校のどこかに火

が放たれることは間違いない。

この中の誰かが、犠牲者になるかもしれない。と、そのとき。

るみねが決意を新たにしたら、そのときだった。

「……そうか！」

見落としてい いや、見えていたものに、気付いたのは。

そしてその閃きは一つの結論を 明確な目的地を、導き出した。

『赤い女』はきつとあそこにいる。

頭の中の地図が、カーナビのように目的地までの道筋を教えてください。だからるみねは、導かれるままに走り出した。

走る、走る。

持てる限りの全力で、出せる限りの全速力で、走り続ける。

すれ違う学生と肩がぶつかりそうになっても、るみねは足を止めない。そして、そんな学生たちが大きなヒントだった。

この学校には、まだ多くの学生や先生が残っている。

図書館にも、校舎内にも、グラウンドにも、体育館にも。

至るところに、人が 人の目がある。

そんな場所に『赤い女』が来たら、どうなるだろうか？

街中で噂となっている金髪碧眼の赤いコートの女が現れたら、どうなるだろうか？

答えは簡単。あつという間に騒ぎになって、学校中に知れ渡る。

だけど今、学校にそんな様子はないし、『赤い女』がそんなことを望む理由もない。

誰かに見つかってしまえば、動きにくくなるし、放火犯として捕まってしまうえば、計画がここで失敗に終わってしまう。

それならば『赤い女』は、この学校のどこを狙うのか？

その答えも簡単だ。誰にも見つからない、人の目がないところを狙う。

そして、るみねには一つの心当たりがあった。

だから魔法科学科の校舎の端まで行き着くと、勢いそのまま九十



度方向転換。するとようやく校舎の向こう、ちょうど彼女の正面に目的地が見えてきた。

魔法科学の様々な実験・実習を行うための施設　実験棟。

教室を二つ縦に繋げたくらいの大ささの、装飾のないシンプルな建物。そして校舎に沿って第一から第六まで並ぶ実験棟の、一番端にそれはあった。

昨日の午前中、オリエンテーションで校内の施設を巡ったとき、『先日、業者さんの倉庫が不審火に遭ってしまったので、この工事は今、一時中断となっています。一応、危険なので皆さんは近寄らないようにしてください。えーっと……袴田さん、聞いてます？』と、フリードが説明してくれた、まだ骨組みだけしか完成していない建物もどき。

「第七実験棟」

その前に辿り着き、るみねは走り続けた足を止めた。校舎ほぼ半周の全力疾走は、さすがに息が上がる。涼しくなってきた春風も、火照る体をそれほど冷ましてはくれない。

だけど、今は自分の体を気遣っている場合じゃない。やるべきことが他にある。

と、そんな使命感で、るみねが辺りに意識を集中し始めたときだった。

「あなたが探してるのは、私かしら？」

待望の　そして絶望の音が、彼女に問い掛けた。

「っ！？」

驚くよりも先に、声のした方向へ振り向く。

そして自分の真後ろ立つ　まるで退路を断つように立ちはだかる、彼女を見た。

人形のように美しい顔立ちに映える、金の髪と碧の瞳。

そして、赤く染まった世界でも一際鮮やかな　紅蓮のロングコート。

それがせつかくの白い肌を首から膝まで隠し、見方によっては下

には何も身に着けていないようにも見えた。

「……………」

しかしそんなことを思う、ましてそれを口にする余裕など、今のみねにはなかった。

言葉が出ない。むしろ言葉というものが、どういふものだったかが思い出せない。

だけど、体は自然と動く。金髪碧眼の彼女から遠ざかろうと、本能的にじりじりと足を後ろに進める。

「あなた、もう少し周りをよく見た方が良いわよ」

一昨日、私がプレハブの裏に隠れてたつて気付かなかったでしょ？

諭すように優しく笑い、フレアはゆっくりと一歩、みねとの距離を縮めた。

「あ、そういえば気になっていたんだけど、どうやってあの炎を消したの？ 簡単に消せるような火力じゃなかったはずんだけど」  
安全のため消火器はちゃんと処分しておいたのに、と首を傾げるフレア。

しかしそれに、みねは答えない 答えられない。

頭の中で鳴り響く警報がうるさくて、彼女が何と言っているのか聞こえない。だけどその騒音のおかげで、やけにくつきりと彼女の一拳一動を視界に捉えることができる。

「ひゃっ！」

不意に情けない声が口から出た。そして気付いたときには、みねは軽い衝撃と共に、固いアスファルトに尻餅をついていた。

もつれた足がガクガクと震えている。もう立ち上がることはできそうにない。

だけどそれでも、体はフレアから離れようと足掻く。役に立たない足を引きずりながら、腕の力だけで自身を引っ張る。

「あーあ、惨めな格好。可哀想な女の子」

フレアはそんな彼女を蔑むような目で、文字通り見下げる。距離

を詰めることは、もうやめていた。

「きつと世界で何が起こっているかも知らずに、この平和ボケした国で育ってきたのね。だからこんなとき、無様に逃げることで済まないのね。ああ、なんて可哀想な女の子」

コートと同じ色の手袋をした左手を顔に添え、嘆くような表情を浮かべるフレア。

その顔を見て、るみねはようやく理解した。

さっきから鳴り響いている警報　警告。

それが何を伝えようとしているかが、ようやく聞こえた。

逃げなきゃっ！

彼女の瞳に宿っているのは　紅蓮の炎。

悪意も敵意も殺意も全て混ぜ合わせた、燃え盛るような視線。

だけでもう、腕にも力が入らない。こんな状況にも関わらず、頭のどこか冷静な部分が「これが『蛇に睨まれた蛙』という状態だよ」と教えてくれる。

だから、そんな風に固まってしまったるみねを見て、

「大丈夫。安心して」

フレアは優しく微笑みかける。

「あなたみたいな可哀想な女の子を、私は救ってあげる。最後は華やかに『人柱』という大役を任せてあげるから」

だから、ね。  
と。

フレアは右手を　手袋をしている左とは違い、白く細い指が美しい裸の手を。

中指に妖しく光る、大きな紅い石の指輪を見せつけるように。

まるで銃口を突き付けるように　るみねに向けた。

そして

「？私たち？の世界のために　死んでっ！」

狂喜に歪んだ顔で、とても楽しそうに笑った。



第六談。あなたの魔法の使い方は間違ってる

2

どうしてルビーが光り輝いているんだろう？

そういえば、あのときの小石に似てるけど。

どうして指輪から炎が噴き出しているんだろう？

小石と同じで、方式プログラムみたいな見たことない模様が彫られていたけど。

どうして世界はこんなにも静かで、ゆっくりなんだろう？

あ、そうか。これが走馬灯ってやつなんだ。

ということは私、このまま死ぬんだ。

この炎に焼かれて、死んじゃうんだ。

でも、やだなー。熱いのとか。

多分、死ぬほど熱いんだろうなー。

って、そりゃそうか。死ぬほど熱いから、死んじゃうんだもんね。

あーあ。私の人生、たった十六年かあ。

短いなー。これが『美人薄命』ってやつなのかな。

え？ 自分で言うなって？

別にいいじゃない。最後 いや、最期なんだからさ。

最期くらい、やりたいようにやらせてよ。

でも、本当はやりたいこと、もっと他にいっぱいあったんだよね。

勉強頑張って、パパの手伝いもしたかったし。

ママには、これから料理を教えてもらう約束だったし。

結局、今でも崎守くん<sup>①</sup>にテストで勝つてみたいし。

パトリニアで、女郎花さんのパフェも食べてみたかったし。

いつか大好きな人と恋をして、同棲して、結婚して、そして子ども

もが産まれて……。

……あーあ。

ダメだ。

やっぱり、ダメだ。

諦められない。

諦めたくない。

私　死にたくないっ！

誰か。

誰か。

誰か

「　助けてっ！」

「うん、いいよ」

と、答える声が聞こえた。

迫る恐怖に目を瞑ることしかできなかつたるみねの耳に、そんな声が届いた。

いつもと何も変わらない　緊張感も緊迫感もない声。

ふっと瞼を閉じる力が弱くなるのを感じる。体は燃えるように熱いが、これは実際に燃えているわけではない。

だから、ゆっくりと目を開けると、

「ふー、ごちそうさまでした」  
炎を全て食べ尽くした彼の背中が、るみねの視界いっぱいプログラムに広がった。

よく目立つ灰色の髪に、全身に赤く浮き上がる方式。

「それで……僕は、何を助ければいいの？」

なんて、状況をまるで理解していない様子の彼は

「　藤、春吉」

やっぱりバカだった。

そして、そんなバカは難しい顔をして、

「ん、僕？　僕は僕を助ければいいの？　それってどっいう意味いっ！」

奇声を上げ、自分の腹を叩いた。

パンパンパン、と。体に付いたゴミを、慌てて払うかのように。「うわー、危ない危ない。教えてくれてありがとう、袴田。もう少しで母さんに怒られるところだった」

まあ、ちよつと焦げちゃったけど。

そう残念そうに、自分の制服を見る春吉。視線の先には、確かに少し黒く変色したブレザーの裾があった。

「あなた……今、何したの？」

声を掛けられ、春吉が顔を上げる。

そこには、怪訝な表情を浮かべる金髪碧眼の女。突然現れた正体不明の敵に対して、素早く十分な距離を取っていたフレアがいた。

「あなた、一昨日その子と一緒にいた子？ 体のその模様は一体何？ それで炎をかき消したの？」

赤く輝く春吉の体に、強い警戒の色を見せるフレア。質問を投げ掛けながらも、彼の指の動きにまで注意を払い、相手の次の一手そして、それに対する自分の一手を考える。

しかし、そんな風に思われていると気付けるはずもない春吉は、普通に 何の危機感もなくフレアから視線を外し、後ろで座り込んだままのるみねに訊く。

「えっと、こちら様はどちら様？」

「どちら様って……『赤い女』よ。というか、何でアンタがここにいるの？」

普通科の方を探してたんじゃないの？

そう言っつて、ようやく動くようになった足で立ち上がったるみねに、

「あのときと同じ香水の匂いがしたんだ」

と、とても当たり前のように春吉は答えた。

「だから、その匂いを追ってここまで来たの。なるほど、この人が『赤い女』さん……どうも初めまして、藤春吉です」

「……………」

軽く会釈した春吉から、一瞬たりとも目を離さないフレア。彼の暢気な　まるで緊迫感のない行動が、より一層警戒心を強める。

「アンタ、普通に挨拶してるんじゃないわよ。気を引き締めなさい。右手の指輪　あれから、炎が火炎放射器みたいに噴き出すから」

多分、ルビーに『火』の方式プログラムが組み込まれてるのよ。

と、いつまでも状況を把握しない春吉に、るみねは注意を促した。

しかし

「プログラム方式？」

るみねの言葉に反応したのは　フレアだった。そして、

「ふふっ……ふふふっ」

彼女は、とても楽しそうに　とても不愉快そうに、笑って。

「ははっ、ははははっ　そんなものと」

右手の指輪を、春吉の後ろに隠れるるみねに向けた。

「　科学なんかと一緒にしないでっ！」

感情が具現したかのように、指輪から迸る紅蓮の炎。宙を走るそれが、槍のように一直線に二人を貫こうとしてくる。

「　ただ、春吉は怯む様子など微塵もなく、

「袴田はそのまま、僕の後ろにいて」

るみねを守るように、その矛先を自らの胸で受け止めた。

「　……　おおおおおおおおおっ！」

炎の槍を呑み込み、烈火の如く輝きを増す春吉の方式プログラム。その赤い光はついに、厚手のブレザーさえ透過する。

そしてフレアから放たれた炎は、瞬く間に全て彼の体に吸収されていった。

「うぐっ……」

「　だ、大丈夫！？」

小さな呻き声を上げて、ガクンと片膝をついた春吉。今まで炎を吸収した際には、なかった反応だ。

だから心配になって、るみねは慌てて彼の顔を覗き込み、

「……えっ！？」



彼女の表情は驚きに一変した。  
そこにはハムスターのように頬を膨らませ、苦悶の表情を浮かべる春吉。

しかし彼の口いっぱいに入っているものは、サンドウィッチなどではない。閉じられた口からは中を覗けないが、るみねにはそう断言できた。

ユラユラと。メラメラと。

口の隙間から、わずかに漏れ出している真っ赤な炎。  
そして

「ダメだ……吐きそう　ってか、吐くっ！」

宣言通り、春吉は口から吐き出した。

今食べたもの　よりも一回り大きな、炎の塊を。

「　っ！」

例えるなら　ドラゴン。漫画や小説なんかに登場する、火を吹く竜。

るみねがそんな印象を抱いたのは、吐き出された炎がフレアの姿を包み込んだとき。自分と同じ驚きの表情を　声も出せず、ただ目を見開くだけの彼女の表情を、見た直後だった。

「あああ……どうしよう、やっちゃった……」

不意の炎を浴びて、白煙を上げる紅蓮の人影。

その光景を見て、春吉の顔が　全身が、文字通り青ざめる。吸収した熱エネルギーを使い切り、全身で赤く輝いていた方式が、急速にその姿を消していく。

「……………」

呆然と立ち尽くし、るみねは言葉を失っていた。

春吉の体の異常性については理解していたつもりでいた。だがその程度の理解では、まだまだ不足だった。

彼の体に方式構築プログラミンクされているのは「身近なエネルギーの吸収と放出」。

使い方は、呼吸　そして、深呼吸に似ている。

だから、吸つたら吐く　　大……大きく吸つたら、大……大きく吐く。  
だけど。

「だけど、こんなのまるでなるほど、そういうこと。体の模様　それで私の炎を吸収してたつてわけね」

まさか、口から吐き出してくるとは思わなかったけど。

まるでみんなの考えを読み取ったかのように、極めて冷静な声で彼女は言った。

「な、何で　　そして彼女の姿を見て、

「何で無事なのかって？」

口にしよとした言葉は、フレアに先読みされた。

「このコートはね、一切の炎を通さない　　全て無効化する。……」

まさか、私が意味もなく、こんな派手な格好してるとでも思った？  
「だつたらずいふんとバカにされたものね、と失笑するフレア。立ち上る白煙が完全に消えたその姿は、何一つ　金の髪一本たりとも焼け焦げていない状態だつた。」

そして彼女は笑みを不敵なものに変え、こう続ける。

「第一　炎の魔法を扱う者が、炎に対して無策なわけがないでしょうっ？」

「……魔法？」

「るみねがそのまま疑問を口にする。その言葉に違和感を　　だけ  
ど、心のどこかが落ち着く感じがした。」

すると、今度は優しい笑顔を浮かべ、

「……そうね、自己紹介がまだだつたわね」  
「フレアは疑問に答える。」

「私は、炎の魔術師・フレア。この間違つた世界を焼き尽くす者」

「……」  
「そんな人間、存在するわけない……って、顔をしてるわよ」

表情を読み取り、フレアはるみねにそう告げる。

「でも、確かに存在しているのよ。魔術師は。世界の『理』を理解し、それを扱う優れた力も持っているのに、何も知らず何の力もない下等な人間に虐げられ、存在を否定され続けている？ 私たち？ はっ！」

だから、と炎を宿した碧の瞳で、青に染まり始めた空を見上げるフレア。

「私は？ 私たち？ の存在を、世界に知らしめる！ そのために、この街には尊い犠牲となってもらいたいんだよ！」

科学で有名なこの街を焼き尽くしたら、世界は？ 私たち？ を認めざるを得ないでしょう！？」

そう言って、フレアが笑う。

狂喜に満ちた表情で、笑い続ける。

「袴田。これ持って、どこか隠れてて」

と、一昨日と同じような台詞で、同じくブレザーを投げ渡す春吉。その顔は、いつになく、というか、初めて見せる真剣なものだった。

だからるみねは、ブレザーを抱きしめるように受け取ると、こくと強く頷き、言う通りに彼のそばから駆け足で走り去る。そして第六実験棟の陰に、春吉から十分に、フレアからは十二分に離れた場所に移動し、くるりと振り返った。

春吉は、ネクタイを解いていた。まるでそれが自らを束縛する首輪であるかのように、ネクタイを解き、無造作に投げ捨てた。

そして、シャツのボタンを一つ外したところで

「あなた……何してるの？」

フレアが声を掛けた。さすがのフレアも、声を掛けざるを得なかった。

当然だ。

この時点で春吉は、シャツとパンツしか身に着けていない。

眼前で、というか敵前で、おもむろに脱衣を始めた男の子がい

れば、突っ込まないわけにはいかない。正直、フレアが口にする直前まで、るみねが突っ込もうと思っていたところだった。

「えっと あ、大丈夫です。僕は下から脱ぐ派の人間なんで」

「……………」

絶句である。フレア そしてるみねも、言うべき言葉が見つからない。というか、言いたいことがあり過ぎて、何から言えばいいのか分からない。

だから二人の女性に無言で見つめられながら、着々とボタンを外していく露出狂。

ちなみに下半身に纏っているものは、トランクスタイプの赤いパンツだけ。ズボンはもちろんのこと、靴も靴下も履いていない。

「すいません、お待たせしました」

と、白いシャツをネクタイやズボンと同様に投げ捨て、ようやくパンツ一丁で 真っ赤な、勝負パンツで。

春吉はフレアと改めて正対し 対峙した。

「……………それは、私の炎に対する余裕の表れ？」

纏う雰囲気が変わったことを感じ、フレアは彼に標準を合わせるように指輪を構える。

「いくらあなたが炎を吸収して撃ち返したところで、私には効かないって分かっている？ このコートが炎を全て無効化するって分かっている？」

「えっと……………そうでしたっけ？」

「 そうよ。つまり、カウンタータイプのあなたの攻撃は、私にはまるで無意味だったこと。それとも、私からこのコートを剥ぎ取ってみる？」

当たり前だけど、私があなただけに自分から脱ぐことはないわよ。

そう言って、フレアは小さく笑う。

それに対し春吉は少し押し黙った後、それは、と口を開いた。

「後で怒られたり、訴えられたり、逮捕されたりしないですか？」

「もちろん。むしろ『よくできました』って褒めてあげるわ」

それに警察沙汰は私の方が困るもの、とフレアは言う。いつでも応戦できるように、指輪を構えたままで。

だから春吉も、何だかよく分からない構えを取ったまま、彼女に訊く。

「……あの、フレアさん。もう一つ質問してもいいですか？」

「どうぞ、何でも」

「こんなときにアレですけど、パンツを見せてはもらえないでしょうか？」

ふっ、と彼女の口からかすかな笑いが漏れた。

そして

「いいわよ、存分に見せてあげる　私に勝てたらねっ！」

それが、戦闘再開の狼煙となった。

しかし放たれたのは当然、煙でなく炎。指輪から迸る　紅蓮の

槍。

「っ！？」

の、はずだった。遠くで見守るるみねもそう思ったし、春吉もその予定で身構えていた。

だがしかし、指輪から噴き出た炎はぐるりと方向を変え、その場で円を描いた。

「私、分かってる　いや、知ってるのよ」

噴き出る炎がグルグルと渦を巻き、瞬く間にその形を球体へと変えていく。そして、

「　あなたはこの炎を受け止められないっ！」

完成したそれを、春吉に向けて放った。

一直線に迫る炎の玉。スピードは今までの炎と大して変わらないし、一点に集中したためサイズはサッカーボール程度。

だから春吉は、ゴールキーパーのようにそれを両手で受け止め

「　熱いっ！」

きれずに軌道を変え、空へと弾き飛ばした。

「な、何で!？」

るみねの驚きの声が、二人の耳にまで届く。

炎なら 熱エネルギーなら、体の方式が吸収するはず。火に対する恐怖や熱さなど、彼はこれまで一切感じてこなかった。

なのに、今!

春吉は間違いなく『熱い』と叫び、炎を吸収する事もできずに弾き、火傷したように自らの息で手を冷ましている。

「やっぱり、思った通り」

そんな光景を見て、フレアが笑う。

「? 私たち? の中にも、あなたみたいな吸収系の魔術師はいる。だから私、知ってるのよ。その手の能力には、一度に吸収できる限界があるってこと。当然よね、口より大きなものを食べることなんてできないものね だから」

得意げにそう言っつて、フレアは新たに指輪から出した炎を球体へと成形し、

「こんな風に圧縮させ、超高温と化した炎は吸収できないのよねっ!」

全く同じものを全く同じ軌道で、再び春吉に放った。

炎が炎を焦がす、紅蓮の玉。綺麗な形を保つことで、一切の熱を外に逃がさない。

「避けなさいっ!」

第六実験棟の陰から、るみねの指示が飛んだ。方式プログラムの力で吸収はできないし、パンツ以外に何も身に着けていない彼には、それを防御する術もない。いや、たとえ服を着ていたところで、どうにかレベルでもない。

だけど るみねの声が聞こえているにも関わらず、春吉はそこから一歩たりとも動かない。

ぐつと腰を落とし、迎え撃つような体勢で右の拳を構え

「はあぁっ!」

咆哮と共に、紅蓮の玉を殴りつけ 地面へと叩き落とした。

「あ……つちいいいっ！」

今度は悲鳴を上げて、春吉がブンブンと拳を振り回す。そこからは、うつすらと白煙が上がっているのが見える。

「アンタ、何で」

「だって、ここを燃やされたらダメなんでしょう？」

質問内容を先読みして、答える春吉。その彼の言葉で、はっとるみねは気付いた。

春吉の後ろには 第七実験棟。

まだ骨組みだけしか完成していない建物もどき そして、フレアの計画を完成させる最後の標的。

「……」

と、思わず口にしそうになる。

彼の足下 丸く陥没した地面を見て、るみねは堪らなくその言葉を言いたくなる。

舗装していたアスファルトが溶けて、跡形も残らず蒸発している。つまり、今の炎の玉はそれほど熱量を持っていたということ。

普通の人間なら、触れることさえできない。

「……」

るみねの喉で止まった言葉を口にしたのは、フレアだった。

「……」

指輪を構えたまま しかし新しい紅蓮の玉を作ろうともせず、

フレアが訊く。

「……」

「……」

「……」

「……」

は、あなたのことを決してそんな風には思わない」

現にその彼女、と第六実験棟の陰に隠れるるみねに、一瞬ちらりと視線を移す。

「彼女が今、あなたのことを 私たちのことを、どう思ってるか 教えてあげましょうか？」

「……………」

春吉は答えない。だけどそれに構うことなく、フレアは笑う。

とても嬉しそうに とても悲しそうに、笑う。

「化物よ！ 化物！ 異形の人外を見るような目で、私たちの ことを見てるわ！」

「そ、そんなこと」

「一瞬たりとも思わなかつたって、あなた本当に言えるっ!?!」

反論を口にしようとしたるみねを、フレアが殺意の瞳で黙らせる。

「分かるのよ！ あなた、私の親と同じ目をしてる！ 私を捨てた 親と同じ目を！」

どうして捨てられたか教えてあげましょうか、と彼女は楽しそうに笑う。眼前の春吉 敵前であることなど忘れ、るみねだけを睨みつける。

「私が世界の『理』を知り、魔法を使えるようになったから 魔術師として目覚めたから、私は凡人である両親に捨てられたの」

化物と呼ばれ、捨てられたの。

「だけど、おかしいと思わない？ 私たち魔術師は、人間として上位の存在よ？ それが少数派だという理由だけで、多数派の凡人に 虐げられる。否定され 時には化物として処分される」

実際、私の両親も私を殺そうとしたしね。

そう言って、フレアは笑う。

笑って、笑って。

笑い続けて、言葉を続ける。

「だから私は、この世界を破壊する！ 私たちの力 魔法の真似 事をする科学を、否定する！ 上位種である魔術師が正しい世界に



作り直し、その頂点に立つ！」

フレアは高らかにそう宣言すると、

「ねえ、ヒーローさん？」

次はまるで別人のように優しい表情を、春巻に見せた。

炎を食って、吐いて、受け止めて、殴りつける。そんな普通の人間ではない彼に。

「私、思うのよ　あなたはこちら側の人間だって。あなたの能力は限りなく魔法に近くて、限りなく科学に遠いつて。だからこの低能な世界では、あなたは決して受け入れられない　認められないつて」

だから、ね。

と、フレアは手を伸ばした。

攻撃のための右手で、春巻に握手を求めように。

「今なら、あなただけは助けてあげる。？私たち？の仲間を迎え入れてあげる。大丈夫、みんな歓迎してくれるわ。だから、優れた能力を持つ者が正当に評価される世界を、一緒に作りましょう」

彼女の誘いの手を、じっと見つめる春巻。そして、

「……僕、バカだから」

情けなさそうに頭を掻きながら、口を開いた。

「フレアさんが言ってたことを、なんとなくしか理解できなかったんですけど……それってこの街の人を　世界中の色々な人を、傷付けるってことですよね？」

「……………」

「実は僕、一度死んでる人間なんですよ。だから自分が傷付くことも、もう一度死ぬことも怖くない　なんて、絶対に言えない。熱いのも痛いのも苦しいのも、やっぱり嫌い。死ぬほど嫌い」

だけ。

「それ以上に、誰かが傷付くのが嫌い　僕と同じような思いを、誰にもしてほしくない。僕はこの命を母さんに　魔法科学に助けてもらった。だから僕はこの化物みたいな力を、誰かを助

けることに使いたい。魔法だろうが科学だろうが、そう使うべきだ  
と思ってる」

それに、と笑みを浮かべる。

「そんな世界じゃ、楽しくスカートめくりできないでしょ？」  
と、そう言ってから、

「だから、フレアさん」

心も体も彼女の真正面に立って、春吉は否定する。

「あなたの魔法の使い方は間違ってるっ！」

「そう……それは残念だわ」

その口元が少し優しく緩んだように、春吉には見えた。だけど次の瞬間には、

「それなら私を　これを止めてみせることね」

いつも通りの狂喜の笑顔で、フレアは笑う。

拒まれた握手を、攻撃に構え直す。そして、指輪から噴き出される紅蓮の炎。

それがグルグルと渦を巻き、渦を巻き、渦を巻き続け

「これが、今この石に残ってる全ての炎　今の私の、最高にして最大の魔法！」

太陽のような輝きを放つ、純白の玉を作り上げた。

そして、最後の標的である第七実験棟に向けて。

だけど、明らかに春吉を狙って。

「灰も残らず、焼き尽くされなさいっ！」

魔術師・フレアは、その一撃に己の存在意義を賭けた。

「……………」

ダメだ。

そう、思った。

今までの炎の玉とは、これはレベルが違う。

炎が放つ白い光は、より高温であるということの証明。熱いとか

火傷とか、そういう問題じゃない。熱いと感じる神経が　火傷を負う皮膚が、一瞬にして蒸発する。

しかも、今までのサッカーボールのような、そんな小さなサイズではない。両腕を伸ばして抱きしめても余るほどの、例えるなら大砲の玉のような大きさ。そのせいか、エネルギーの塊なのに重量感があるように見え、スピードは今までより少し遅い気がする。

だけど。

だけど、少し遅いからと言って何ができるわけでもない。

こんな大きなものを、弾き返すことなんて不可能　できて、わずかに軌道を逸らすのが精一杯だ。

そして、その程度の誤差なら大差はない。

少し逸れたところで、確実に後ろの第七実験棟に命中する。いや、それ以前に、触れることもできないものを　触れた瞬間にその部分が蒸発するようなものを、どうにかできるわけがない。

だから　諦めなさいよ。

アンタがそこにいても、何も変わらないのよ？

アンタはそこにいたら、何も残らないのよ？

なのに、どうしてそこから一步も動かないのよ？

もうすでに、この街を守る方法なんかはないのよ？

ヒーローとか、化物とか、魔法とか、科学とか。

そんなのは、どうでもいいのよ。

アンタは、バカ以外の何者でもないわよ。

だから　お願い。

「　逃げてっ！」

「　一つ　言い忘れてたことがあるんですけど」

と、春きは。

るみねの叫びが聞こえていないかのように、暢気に言った。

「僕の能力は、炎を吸収して吐き出すことじゃないです。この方式

は『命』の魔法科学……らしいです。だから僕は　どんなエネルギー

ギーでも吸収して、それを使えるんです」

魔法科学の五属性、その全てのエネルギーを。

「……………」  
そつだ。少し考えれば分かることだ。

炎の玉を殴って叩き落とすなんて、不可能だ。

だって、相手は炎　熱エネルギーそのもの。流れを操作することはできても、触れることができないわけがない。

だからあのとき、彼の拳が炎を叩き落としたわけじゃない。

拳が纏う、目に見えない『それ』が　熱エネルギーに干渉したんだ。

そつ、るみねが結論に達したときには、

「　おおおおおおおおおおおおつ！」

春吉は力限りの雄叫びを上げていた。

それは、炎の槍を吸収したときと同じような咆哮。しかし、さつきとは決定的に違う点が二つある。

一つは、彼が今回、吸収するのは炎ではないということ。白い炎は、まだ春吉の体には届いていない。

もう一つは、彼が今、パンツ以外に何も身に着けていないということ。

つまり　体の方式プログラムと周りのエネルギーを遮るものがない状態。

吸収も放出も、これなら最高効率の最大出力で行える。

だから春吉は、目一杯に息を吸い　腹一杯に周囲の『風』を食べ尽くし。

ありつたけの運動エネルギーを　体一杯に吸収して。

青く。蒼く。

透き通るような　突き抜けるような、澄んだ空の色で。

るみねの瞳にも届くほどに、全身の方式プログラムを輝かせた。

「だから　フレアさん」

春吉が拳を構え、迎撃の準備を整える。

それは、炎の玉を叩き落としたときと同じ体勢。

ただし今回はサイズが違うので、そこから繰り出せるのは突きだ

け。

そして今、彼がその拳に纏っているのは　小さな嵐。目に見えるほどの、風の塊。

だから春吉は、フレアの最高にして最大の魔法に。

一人の魔術師の、存在意義と存在証明を賭けた一撃に

「　あなたの魔法、吹き飛ばさせてもらいますっ！」

正々堂々と真正面から、自らの一撃を放った。

ドンっ！

という爆音、突風、白煙。

そして　静寂。

辺り一面を包んでいた白煙が、ゆっくりと晴れていく。

「ふふっ……ふふふ、はははははっ」

やがて、世界が元の姿に戻ると　春吉も第七実験棟も健在だと分かる。

「あーあ、私の負けね　だけど」

フレアは、とても悔しそうに　とても満足そうに、笑って。

「　？ 私たち？ の勝ちね」

魔法陣の完成を　計画の完遂を喜んだ。

途端、第七実験棟の至るところに仕掛けられたそれが、同時に赤く光り出す。

「な……あっ」

位置の関係上、るみねは春吉より早くその変化に気付いた。だけど、彼より早く気付けたところで、手も足も言葉も出ない。

気付くのが遅過ぎた。いや、もっと早くに思い出すべきだった。

『赤い女』の手口を　フレアが、どうやってプレハブを燃やそうとしたかを。

そして異常なまでに大量に　決して最後で失敗しないように持っていた全てを、随所にはら撒かれた赤い小石は。

無慈悲に一瞬で、第七実験棟を炎に包んだ。

赤く。紅く。

ユラユラと。メラメラと。

この街を焼き尽くす復讐の紅蓮に

「……っ、……な、な……何で？」

一番驚いたのは フレアだった。

確かに、最後のポイントは目の前で燃えている。この街全体に仕掛けた魔法陣は、これで完成している。

なのに何故、魔法陣が発動しない！？

間違いなく、完成と同時に発動するようにしたはず。このコートがある以上、たとえ巻き込まれたとしても、私は何の問題ないと思っていた。

それなのに、魔法陣は発動しない。『炎の理』を知る私が、その気配すら感じられない。

「……私は、失敗したの？」

ただ呆然と ここが戦場で、自分が敵前であることを忘れ、立ち尽くすフレア。

だから、

「約束、覚えてますよね？」

と、距離を詰められたことに気付いたのは、自分の足下に灰色の髪が見えたときだった。

ほんの一瞬、わずかに一步。

プログラム 背中プログラムの方式から放出した風で、第七実験棟の炎を吹き飛ばし、同時にそれを推進力にする。そんな化物みたいな能力を、ヒーローみたいに使った春吉。

そして、フレアの足下で体を小さく縮め、拳に嵐を纏った彼は、こう言った。

「 本当に褒めてくださいよっ！？」

結果として。

全身のバネと、プログラム方式から放出させた風を利用した春吉のアップパー

は、フレアには当たらなかった。それどころか、彼女の体にかすりもしなかった。

ただその一撃は、フレアの象徴とも言える紅蓮のロングコートを破壊した。彼女の膝から首まで覆っていたそのの、前面のボタンを全て引き千切ることによつて、炎の完全無効化を無効化した。

だからフレアは、その場から逃走した。街を火の海に変える計画は失敗し、指輪の炎は使い切り、防御まで半減された彼女にとつてそれが唯一の選択肢だった。

対して、春吉は追撃しなかった。彼は微動だにせず、逃げる彼女を一切追わなかった。

やがて、フレアの姿が見えなくなって。

炎の魔法を操る魔術師がいなくなつて、

「……大丈夫なの、アンタ？」

と、るみねはようやく、立ち尽くす春吉の元に駆け寄つた。

彼女には一つ、疑問があった。

それは、今の攻撃のこと。明らかに油断し、反応すら間に合っていないかつたフレアに、春吉が自ら攻撃を外したように見えた。

最初から攻撃する意思はなく、わざわざフレアとコートの隙間に拳を入れて、彼女からコートを剥ぎ取るうとしていているようにるみねには見えていた。

だからそのことを訊こうと、徐々に方式プログラムが消えていく春吉の顔を覗き込んで、るみねは驚いた。

彼は、何かの攻撃を受けたように鼻から血を流していた。るみねが見ていた限り、フレアから物理的な攻撃は受けていないはずなのに、春吉の鼻からはドクドクと血が流れ出ていた。

けどどそんな状態にも関わらず、彼はピクリとも動かず、痛がるどころか恍惚の表情を浮かべ、夢見心地に呟いた。

「紫のレースは……とんでもない破壊力だな……」

ちなみに、るみねがこの言葉の意味を理解するまで、ここから少し時間を要することとなる。

春吉はフレアに勝利し、確かに戦利品を受け取っていた。



「どうだった？ 俺の愛弟子は強かった？」

太陽は完全にその姿を消し、遠くの空をぼんやりと照らすだけ。

だけどそんな空の下でも、都会である野々原市は明るい。中心部は華やかで煌びやかにライトアップされているし、住宅街は決して明る過ぎない程度に街灯が立ち並んでいる。

そしてちょうどその中間、住宅街と中心部を繋ぐ橋の上。

中心部の光を背に、彼はそう訊いた。

「ホント、育てるの苦労したんだよ。まずは空手から教えようと思っただけど ほら、アイツの体、普通じゃないじゃん？ だから普通に格闘技とか教えても、あまり意味なくてさ。まあでも……アンタの姿を見る限りには、ちゃんと言い付けは守ったみたいだな」「あなた……一体、何者？」

ボタンの取れたロングコートでは隠すことができず、黒のワンピースを少しだけ晒しながら、フレアは敵意の眼差しで彼を見た。

誰もいない橋の真ん中で、フレアの進路 いや、退路を断つように立ちはだかる男。

よれよれのスーツに、ゆるゆるのネクタイ。髪はお世辞にも無造作ヘア とは呼べず、顎には無精ひげが蓄えられている。

そんな男が「え？ 何？ 俺に興味あるの？」と、フレアに答える。

「俺は、紫ノ村雄司<sup>ゆうじ</sup>。漢字は……さすがに分らないだろうから省略。仕事は、IT関係の社長 ってのは嘘で、だけど表立っては言えないっつーか、言っちゃいけないような職業」

でもまあ、大雑把に言えば、この国を守る正義の味方ってところかな。

「だから気軽に『雄ちゃん』って呼んでね」

「……………」  
「うわー、黙秘権。やめてくれない？俺がすべったみたいに見えるじゃん」

それとも、と紫ノ村は続ける。

「『矛盾の矛』って名乗った方が分かりやすいのかな　　？OZ？  
の『紅蓮』さん？」

「っ！」

フレアが身構える。とはいえ、指輪を構えることはしない。最大限まで神経と視線を尖らせ、目の前の男を睨みつけるだけだ。

だけど、そんな彼女の変化に当然気付きながらも、

「あんまり見つめるなよ。照れちゃうし、惚れちゃうぜ　　アンタが」

紫ノ村はヘラヘラと笑う。

「いやー、でもまさか街一つ狙ってくるとは、さすがの俺も予想外だったわ。対応が少し遅くなっちゃった。地道な放火からの大連鎖？　パズルゲームかつっの」

「……………」

「でも、さ。そういうのはこの街には効かないわけよ。最強の結界術を使える陰陽師が、この街にいる限りは、ね。……あ、ちなみに陰陽師ってのは、魔術師の日本版だと思って」

「……………」

丁寧な説明を付け加えた紫ノ村に、フレアは動かず　　だけどもつでも動ける心構えで、訊く。

「どうして魔術師であるあなたが、そちら側にいるの？　前に聞いたことがある　　昔はあなたも、魔術師の証明のために戦っていたって。科学を否定し、魔法で世界を正そうとしていたって」

なのにどうして、裏切ったの？

そう、口にしようとしたフレアに、

「　　負けたんだよ」

少し嬉しそうに、紫ノ村は言う。

「一人の魔術師に出会って　もう殺してくれ、いい加減死なせてくれって思うほど心も体もボッコボコにされて、だけど絶対に殺してくれなかったし、死なせてくれなかった。そんな無敵で不敵で素敵な女性に、俺は負けたんだよ」

最後にその人が何て言ったと思う、と彼は笑う。

「『アンタ、負けたんだから私の言うことを聞きなさい。見逃してあげた百八回分の命、全て私に捧げなさい』だって……どんな隷属契約だよって話だろ？」

「……………」

「だから俺は、その人に惚れた。その人は俺には惚れてくれないけど、共に道を歩むことを許してくれた」

魔法でも科学でもない　第三の道を。

「だから魔法科学を否定するヤツを、俺は認めない。そして、俺の愛弟子を　その人が助けた命を傷付けようとするとするヤツを、絶対に許さない。魔術師だろうが女だろうが、然るべき処分を受けてもらう」

ちょっと檻の中までデートしようぜ、と紫ノ村は笑った。

対して、フレアの表情が緩むことはない。ただ、じつと目の前の敵を観察する。

紫ノ村は外見上、何の武器も持っていない。矛盾の矛ゲンゲニルという字あさなから、てつきり槍を使う魔術師だと思っていたが、そんな長いものを所持している様子はない。

しかし、その字で呼ばれていたのは随分と昔。実際に見たことはないし、魔法のスタイルを変えている可能性もある。

だから　と、フレアは右手の指輪に意識を向ける。

この指輪に組み込まれた魔法陣は、春巻の体と近いものがある。炎を放つことがメインであるが、使用していない間は少しずつ周囲の熱を奪って蓄えることができる。

だから、ここまで逃げてくる間に少しだけだが、石の炎の残量は回復していた。攻撃としては心許ないが、威嚇や牽制　そして目

眩ましには、使える程度に。

紫ノ村に勝てるとは、思っていない。圧倒的に向こうの方が経験値は上だし、戦ってはいけない状況だと自分でも分かっている。

紫ノ村との距離は十分。一瞬の隙を作って、来た道を引き返す。最悪、下の川に飛び込んでもいい。

だからっ！

と、フレアが指輪を構えた。

いや、構え終える前に 終わっていた。

ぱぁん、と。

乾いた音が、静寂に鳴り響いた。

「改めて自己紹介しておこうか」

ビクリと身を竦めたフレアに、魔術師であり科学者である男は、それを構えた状態で言う。

「俺は紫ノ村 『地』の魔法科学を扱う者。今の弾丸には『触れたもの全ての結合を破壊する』という方式を組み込んでいる。魔術師ならこの意味、分かるよな？」

白煙を上げる銃口を向けられたフレアが、右手の指輪に目をやる。そこには、まるで最初からその形だったように、綺麗に丸く抉り取られた紅い石。魔法陣が破壊されたそれは、もはや使い物にならない。

グングニル  
矛盾の矛。

どんな盾でも貫く 矛。防御が意味を為さない攻撃。

「女に手を出す男は人間じゃない、と弟子に言い付けてる以上、師匠がそれを破るわけにもいかないんだよ。だから、おとなしく捕まってくれないかな？ 俺は、同志じゃないが同族だ。最低限の保障はさせてもらおう」

白銀の鉄塊 セミオートマチック式の拳銃を構えたまま、投降を促す紫ノ村。その指は引き金に掛けられ、いつでも次弾を発射できるようにしている。

しかし、それに対して、

「ふふっ……ふふふっ」

フレアは笑って、おもむろに左手を包んでいた赤い手袋を脱いだ。「冗談じゃないわ、こっちは命懸けでやってるのよ。まだコントロールできてないから使いたくなくなっただけ、こうなったら仕方ないわね」

そう、紫ノ村を睨みつけたフレアの左手には、赤く複雑な刺青  
炎の魔法陣。それがコートに隠れた左腕全体にわたって描かれて  
いる。

すると、その意味を理解した紫ノ村が、深くため息を吐く。

「あーあ、せつかくの綺麗な白い肌が台無しじゃねえかよ」

「そんなものに最初から興味はないわ。たとえ、この腕が焼き切れても　この命が尽き果てても、あなただけはここで仕留める。あなたは絶対に今後、OZわたしたちの障害になる」

と、彼女が左腕に力を　周りの熱を、集め始めたときだった。

「ここは退いてください、フレア」

唐突に。

ふわりと風に乗った黒い布が、フレアの前に舞い降りてきて

降り立った。

裾が余って地面に擦ってしまっている、漆黒のローブを纏った人間。

顔はすっぽりとフードに隠れ、肌すら見えない。というより腕も足も、体全てがローブに包まれ、黒い布の塊が人間の形を作っているようにも見える。

そんな人間が、機械で変えたような　奇妙に震える声で、続ける。

『自分の命を粗末にするものではありません。今回は相手が悪過ぎます、今のあなたでは傷一つ付けられません。ここは一度退いて、態勢を整え直す必要があります』

声からは、性別も年齢もまるで分からない。

だけど確かに、紡がれる言葉一つ一つには感情の起伏があり、

『お願いです　私はこれ以上、家族を失いたくないのです』  
「……分かりました」

切実なその願いに、フレアはおとなしく頷くしかなかった。  
「おいおいおい、冗談だろ……いつの間に、この国に来てたんだよ」  
拳銃を構えたまま、驚きの声を上げる紫ノ村。

そして、黒いローブの中心　心臓があるはずの場所に、その銃口を向けた。

「まさかOZのリーダーが出てくるとは、思ってもみなかったぜ」  
『それは違います、グングニル。OZにリーダーはいない　私たち全員、家族なのです』

「はっ、よく言っぜ。OZ最強の称号を持つ　『不在証明』さんがよ」

そう言い放って、紫ノ村は引き金に掛けた指に力を込めた。

しかし、ガード不能の矛先を突き付けられても、  
『安心してください、グングニル。あなたにも、ここを包囲しているあなたの仲間にも、危害を加えるつもりはありません　今回はスケアクロウは冷静に、落ち着いて諭すような口調で言う。そして、

『では、また近い内にお会いしましょう』  
と、言った瞬間。

「っ！」

紫ノ村は、漆黒のローブを見失った。

ただし、スケアクロウは微動もしていない。もちろん目の前の敵から、紫ノ村が視線を逸らしわけでもない。

突如発生した　いや、発生させられた局所的な竜巻。

それがスケアクロウ、そしてその後ろのフレアの姿を包み込んだ。吹き荒れる風が、紫ノ村の視界から漆黒と紅蓮を消し去る。

「ちっ……くそっ」

瞬く間に現れ、瞬く間に消えていく竜巻。そして開け放たれた風のカーテンの中に、二人の魔術師の姿はどこにもなかった。

まるで 最初から不在だったかのように。

「 いやあ、さすがは女郎花善庵ぜんあんさんの結界、といったところですかね」

無感情で芝居がかった スケアクロウの方が、よほど心があったように思える声。

紫ノ村がその声を聞いたのは、二人の姿を見失った直後。消えた竜巻のカーテンの向こうから、黒服の男はそんなことを言いながら歩み寄ってきていた。

「ちっ、OZと手を組んでやがったのか ? 戦争屋トロイ？」

「いやいや、手を組んだなんて人聞きの悪い。弊社はただ、フレアさんに力を貸しただけ。科学と戦争をしたいと言っから、色々と手配しただけですよ。弊社は所詮、兵器の開発・販売しかできませんので、戦争に協力はできても参加はできないんですよ」

ただの軍事企業ですから、と歩みを止めず、無表情な笑顔で男は笑う。

「それに、弊社は中立ですよ。魔法と科学、どちらも素晴らしい兵器になりますからね。だから、どちらにも協力させてもらいます。

あ、そうだ。紫ノ村さんにも、是非弊社のパンフレットを」

「いらねえよ。戦争の道具なんて、俺にはもう二度と必要ねえ」

「あら、そうですね。残念です、フレアさんに続いて断られてしまいました。……いやあ、それにしてもフレアさんは、役に立ちませんでしたねえ」

戦争の火種くらいには、なれるかと思っていたのですが。

そう言いながら、紫ノ村の横を通り過ぎる男。

そして、完全に彼に背を向けた状態で、

「ああ、そういえば」

と、男は言っ。

「彼は無事、高校生になれたみたいですね」

「次、アイツに手を出してみる。今度こそ、分子レベルで分解してやる」

振り向くことなく、答える紫ノ村。その手には拳銃、背中からは殺気を放っている。

しかし、そんなことはまるで知らないという風に、

「いやだなあ、あれは事故ですよ、事故。直接は関与しないことが、弊社のルールなので」

黒服の男は笑い、夜の闇へと帰るように、紫ノ村の後ろから歩き去っていく。

「次は戦争で 戦場でお会いできることを願ってますよ、紫ノ村さん」

「……………」

男の気配が消え、はあ、と深いため息を吐く紫ノ村。

「やっぱりこの格好、モテモテじゃねえかよ」



## 余談。あるいは、これからの話

鈴ノ美山高校。

日が沈み、どこかで銃声が響いた頃。

るみねと春吉は、体育倉庫の中にいた。いや、隠れていた。そこに身を潜めていた。

時間は少し戻り、場所も少し変わり。

炎の魔術師・フレアが、野々原市への放火に失敗し、学校から逃走した後。

春吉の鼻血の理由を、理解した直後。

「……あ」

と、るみねはそれに気付き、振り向いた。

彼女の視線の先には 第七実験棟。

暗くなった空へと煙を上げる、骨組みだけの建物。

春吉の方式プログラムから放たれた風で、炎は消えていた。彼の消火活動（

そのつもりはなかったかもしれないが）は、確かに効果があった。

だけど炎が消えても、燃えたという事実は消えない。一瞬で燃えてしまったところは、しっかりと黒く焦げていた。

だから第七実験棟からは、白く輝く月を指す灰色の煙が立ち昇っていた。

そう、それはまるで狼煙のように この場所を誰かに知らせるように。

「……………」

るみねの状況整理タイム。

放火され、煙を上げる第七実験棟。熱で溶け、陥没した地面。

グラウンドの方からは、火事だと騒ぐ声が聞こえる。

そして、そんな場所にいる二人の高校生。

一人は、頭脳明晰・容姿端麗を自他共に認める女子高校生 袴

田るみね。

もう一人は、幸せそうに鼻血を流すパンツ一丁の男子高校生  
藤春吉。

ちなみに春吉の体の方式はもうすでに姿を消し、そこにいるのは  
純粋なパンツ一丁の男の子である。

「……………」

状況整理タイム終了。

だから彼女は落ち着いて、穏やかな声で

「アンタ。脱いだ制服、今の内に拾うときなさい」

「ん？ うん、分かった」

春吉に準備を整わせる。

そして、彼が言う通りに制服を拾い集めたところで。

最初に脱ぎ捨てた右の靴を、拾い上げたところで

「とりあえず逃げるわよっ！」

るみねは、デジャヴのような言葉を口にした。

放火と、変態。

その二つの状況証拠が、二時間サスペンスも真っ青なくらいに揃  
っていた。しかも後者に至っては現行犯。

いくら『女子高生探偵・袴田るみね』でも解決できない事件はあ  
るし、説明し切れない事情がある。

だから、裸足　　というかパンツ一丁のままの春吉を連れて、る  
みねは逃げ出した。

人のいない方へ、声が聞こえない方へ、春吉の格好が目立たない  
暗がりの方へ。

逃げて、逃げて、逃げ回って。

そしてようやく　　今現在。

るみねと春吉は、体育倉庫に逃げ込んでいた。重たい扉を閉め、  
とりあえず誰にも見つからないように隠れていた。

ふう、と安堵の息がるみねから漏れる。

逃げ切れた安心感から　　そして、非日常からの解放感から。

はつきり言って、さつき起きた出来事が夢のように思える。というか、むしろ夢だったといった方が、現実味があった。

しかし頬をつねらなくても、高鳴る心臓が現実だと教えてくれている。

### 魔法と魔術師。

そんな世界が本当に存在している　とは、正直まだ信じられない。

でも確かに魔法科学の範囲を超えた現象が、自分の目の前で起きていた。あんな小さな指輪であれだけの炎を操るなんて、今の魔法科学では不可能だ。

だけど。

だけど、とるみねは考える。

もしも昔の人が、今の科学を　魔法科学を見たらどう思うんだろうか、と。

やっぱり『魔法』みたいに見えるんじゃないか、と。

今日は『魔法』のように見えるものも、明日には『科学』になっている可能性がある、と。

だったら案外、『魔法』と『科学』ってあまり変わらないのかもね。

と、そんな風に思って。

るみねは、魔法みたいな体を　未だパンツ一丁の春巻を見た。

「アンタ、早く制服着なさいよ。いつまでその格好でいるつもり？」  
今のところただの露出狂よ、とるみねは預かっていた彼のブレザーを投げ渡す。

すると、それをしっかりと受け取り「むむ、それは心外だな」と、  
不服そうな春巻。

「何を隠そう、僕は見られるより見る方が好きな人間だ」

「アンタは基本的に全て隠しときなさい！　こっちは見たくも聞きたくもないわよ！」

「なるほど。それじゃあ、僕が隠すかわりに、袴田が見せるという

のはどうだろう?。」

「その提案を、真剣な顔でできるアンタがどうだろう!?。」

というかよく考えれば、アンタが着るのをわざわざ待ってる必要はなかったわね。

それに気付いて、るみねは体育倉庫の扉に手を掛ける。そして、「外に出たら、さっきの『魔法』も『科学』で解明されてるのかもね」

なんて、心のどこかで思いながら。

彼女が扉を開けた。

開けた　ときだった。

「あ」

「む」

「え?」

都合良く、あるいは都合悪く。

二人を探して体育倉庫の目の前に、崎守幸路にいたのは。言われた通りに服を着ようと思った、藤春きがいたのは。

パンツ一丁の男子高校生を残して、体育倉庫を出ようとした女子高校生。

つまり、袴田るみねが　絶叫したのは。

「ちがあああああああああうっ!」

例えば、それからの話。

あるいは、これからの話。

この世界がどう変わっていくかは、私には分からない。

この世界で彼らがどう生きていくかは、私には分からない。

だけど、だから、だからこそ。

私はこの世界の行く末を、見届けなければならない。

愛すべきバカ息子の成長を、ちゃんと見届けたい。

正直、自信はある。

余談。あるいは、これからの話（後書き）

以上、『ただまほ。』でした。

12日間という連日連載にお付き合い頂き、大変ありがとうございました。  
いました。

尚、今拙作は去年に続いての電撃大賞落選作ですので、お見苦しい点が多々あったと思います。ですが、少しでも楽しんで頂けたなら嬉しい限り。

また、ご意見・ご感想など頂けたらありがたい限りです。

ではでは、ここまで読んで下さった貴方に最大級の感謝を！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7870u/>

---

ただまほ。// 正しい魔法の使い方

2011年7月22日22時03分発行